論　壇

モスクワ――この３世紀
Последные 3 веки Москвы

安田　　彰*
YASUDA, Akira

はじめに
Ⅰ．地下鉄敷設と駅名の変遷
Ⅱ．モスクワの貧民窟：ヒトロフカ
Ⅲ．市の心臓部分：獲物街・キタイの壁
Ⅳ．秘密警察と公安の砦：ルビャンカ界隈
Ⅴ．温水プール跡地に出現した大聖堂：クロポトキン駅界隈
Ⅵ．モスクワっ子に欠かせない公衆浴場：サンドゥノフ浴場
Ⅶ．ギリャロフスキーの家：卓布（ストレーシニコフ）横町界隈
Ⅷ．老舗食料品（デリカテッセン）店「エリセーエフ」：トゥヴェルスカヤ通り界隈
Ⅸ．まとめ

はじめに

ロシアの首都・モスクワ（Москва）――その歴史は，ユーリー・ドルゴルーキー（Юрий I В. Долгорукий）による12世紀初めの建国にまで遡れば９世紀の長きにわたる。その後の「タタールのくびき（татарское иго または татарщина）」（モンゴル人による支配圧政）をはね返した15世紀末のイワン３世（Иван III Васильевич）以降と取るならば６世紀の長さになる。モスクワはこの間ロシア最大の都市・首都として冠たる位置を占めてきた。

ロマノフ王朝の中期，18世紀初頭第５代皇帝ピョートル一世（Пётр I Алексеевич）によって，たしかに首都は一時サンクト・ペテルブルグ（Санкт-Петербург）に移された。そして20世紀初めにソヴィエト政権が樹立され（名称はペトログラード〔Петроград〕ついでレーニングラード〔Ленинград〕と変更），首都機能を再度モスクワに移転するまでの間，モスクワは首都の座を奪われていた。

とは言え，この間も歴代皇帝の戴冠式はモスクワのクレムリンで執り行われる等，宗教をはじめとする政治・経済・文化の主要機能は依然としてモスクワに残されており，その存在感には不動かつ確固たるものがあった。

さらに興味深いのは直近の３世紀である。19世

＊本学経営学部教授

紀の帝政時代，20世紀の社会主義時代，今世紀の資本主義社会とほぼ１世紀ずつ政治形態が転換し，その都度モスクワは大きな変動の波に洗われてきた。

モスクワ以上に長い歴史を誇る都市や首都は，アテネやローマを持ち出すまでもなくヨーロッパには少なくないだろう。ただしここ３世紀の間にこれほど激しく政体の変化を経験してきた都市は珍しいといえる。とりわけ社会主義という未曽有の政権を打ちたて，１世紀近く保持し，また崩壊させた実験的な国の首都としてみるならば，その変遷・変貌ぶりには興味を引かれる。

今「変貌」という言葉を使ったが，石造りを基本とするヨーロッパの都市は，モスクワに限らず，旧市街の街並み自体は時代を経ても大きくは変わらない。町の基本は城や市庁舎と教会，市場の開かれる広場を核として，街を取り囲む壁・城塞によって守られている。町の人口や機能が拡大するにつれ街並みは郊外へと広がっていくが，同時に環状道路や城壁が街を囲むようにして円環状に２重・３重に広がっていく。この基本構造はモスクワも例外ではない。王宮城塞・クレムリン（Кремль）とそれを取り囲む石と土の要塞・キタイ・ゴロド（Китай-город），その外側に広がる環状並木道（Бульбар），大環状道路（Садобое Кольцо）と３重になっている。

町や都市の変貌に関し，とりわけモスクワが興味深いのは，都市間を結ぶ鉄道に加え，市内を巡る乗り物が馬車から鉄道馬車，市電，自動車，バスへと発達していくのに合わせ，ソヴィエト連邦（以下，ソ連）時代に新しく敷設された地下鉄の存在である。その延伸が街の発展と重なるのはいうまでもないが，その駅名の変遷が面白い。ソ連時代と今日とでは名称が変えられているものがある一方，そのままのものもある。

このことは通りや広場の名前についてもいえる。多くの名称が，ソ連崩壊後，帝政時代のものに戻されているのだ。それは，社会主義時代の多くの銅像が取り壊されているのと軌を一にしており，あたかも「忌まわしい」社会主義時代を忘れ去りたいとでもいうかのようにも見える。しかし，だからといって農奴時代をふくむ暗黒の帝政時代へ戻せばいいというものでもなかろう。旧称復活は単なる古えへの郷愁（ノスタルジア）によるばかりとも思えない。一方ではマルクス（Karl H. Marx, 1818～1883）やレーニン（Владимир И. Ленин, 1870～1924）あるいはレーニングラードの名を冠した広場や通りも少なからず残されているのだ。こうした判断はおそらく何らかの委員会や諮問機関の議論を経て実施されたものであろうが，世論も含めて，その取捨選択の判断基準がどういうものであったか，興味がわく。

筆者は1970年代（ソ連時代），３夏にわたりモスクワに短期駐在した経験がある。また資本主義社会となって４半世紀を閲した今年度，本学の個人研究費の助成によって現地調査を行ってきた。さらに帝政時代の生活・風俗の情報としてはロシアのルポルタージュ作家・ギリャロフスキー（Владимир Алексеевич Гиляровский, 1855～1935）の名著『モスクワとモスクワっ子（“Москва и Москвичи”）』がある。

本稿ではこれらの資料や見聞によって，19世紀から21世紀までの３世紀にわたるモスクワの変貌ぶりや生活ぶり，いいかえれば実際の「不易流行」について整理・検証してみることとする。壊されたもの，新しくつくられたもの，何も変わらず残りつづけているもの等につき比較検証するとともに，その判断基準がどんな点にあるのか，考えてみたい。

なお，注記のない写真や図表は，筆者自身によるものである。

Ⅰ．地下鉄敷設と駅名の変遷

ギリャロフスキーが故郷からモスクワに出てきたのはまだ19歳のころで，まさに世紀末であった。その後『モスクワとモスクワっ子』が書かれたのは1934年，すでにロシア革命を経てソヴィエト政権による首都の再建が華々しく始まっていた時期であった。

そのはしがきの中で，ギリャロフスキーは漲る町のエネルギーに触れ，詩人プーシキン（Александр С. Пушкин, 1799～1837）の「ボリス・ゴドゥノフ（Борис Годунов）」の一節「…過ぎし日は　目のまえを流れゆく…（Минувшее проходит передо мною）」を引きつつ，地下鉄工事の様子をこう書いている。

「馴染み深い過去には，すでに滅びつつあるもの，また全く消え去ったものもあるが，それを色とりどりの背景として，新しいモスクワが日ごとと言わず，急速に成長していくのを私は目の当たりにしている。モスクワは拡がり，上へ下へと突き進む，未知の成層圏へ，そして地下鉄は地下深く。電灯の明るい輝き，美しいホールの大理石のまぶしさ」（「著者より〔От автора〕」）

確かにモスクワの地下鉄の素晴らしさや美しさ，華麗さは類を見ない。

70余年にわたる絶対社会主義体制がもたらしたものとして，恐怖政治による粛清・圧政や社会経済上のさまざまな矛盾・ひずみがあげられる。だが，こと地下鉄に関していうならば，この時代の数少ない大いなる遺産であるといえるだろう。その見事さは都心部の駅のみならず，町はずれの駅についても例外ではない（写真）。

大理石の壁や緻密なモザイク，みごとな彫刻や

郊外の地下鉄・パルチザンスカヤ駅

鮮やかなステンドグラス，豪華なシャンデリアは，他国のどの地下鉄にも見られない。

地下鉄建設案が初めて提出されたのは帝政時代の1875年であったが，市議会はこれを却下，1931年社会主義政権になって初めて工事着工が決定された。当時の交通手段は貴族や金持ちの使う馬車や鉄道馬車が中心で，ようやく自動車が普及し始めようという時期であった。その意味では，地下鉄は庶民のための初めての公共投資であった。それだけに新しい社会主義政権への期待は高まったことだろう。ギリャロフスキーの文章にもその気持ちが溢れている。

最初の13駅が開業したのが1935年，今の一号線とその分岐線の一部，わずか11.6㎞ではあったが，その後路線は延伸拡大，第２次世界大戦中も工事は続けられ，７つの駅が新設された。その目的はいうまでもなく公共交通輸送にあったが，同時に防空壕としての用途も意識されていた。現に独ソ戦の最中は，ヒットラー・ドイツ軍の空襲から市民を守るべく，数千人が（一説では50万人とも）避難したといわれている。同時に当時のキーロフスカヤ（Кировская, 現・清（チースティエ・プルドィ）池〔Чистые пруды〕）駅には参謀本部が置かれ，仮設の部屋では司令部のスタッフが働いた。

こうした輸送や防空壕用途に次いで，モスクワ

地下鉄路線の延伸・拡張の変遷

1962年現在

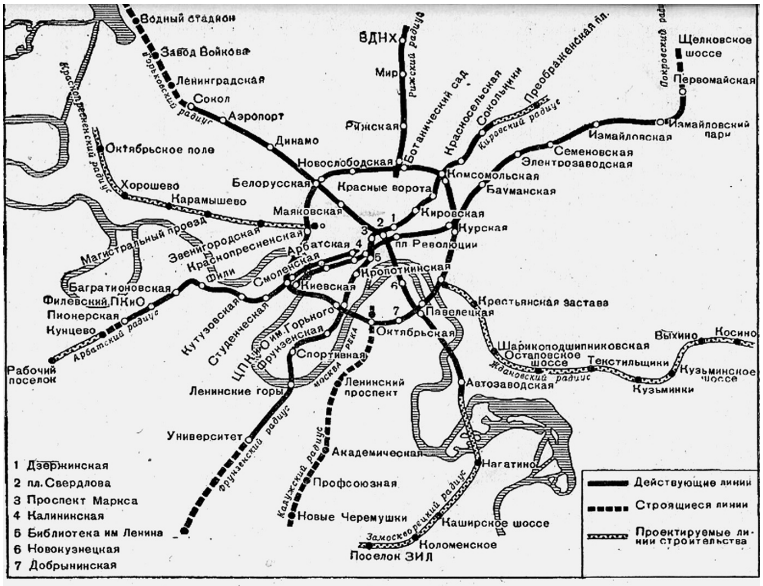


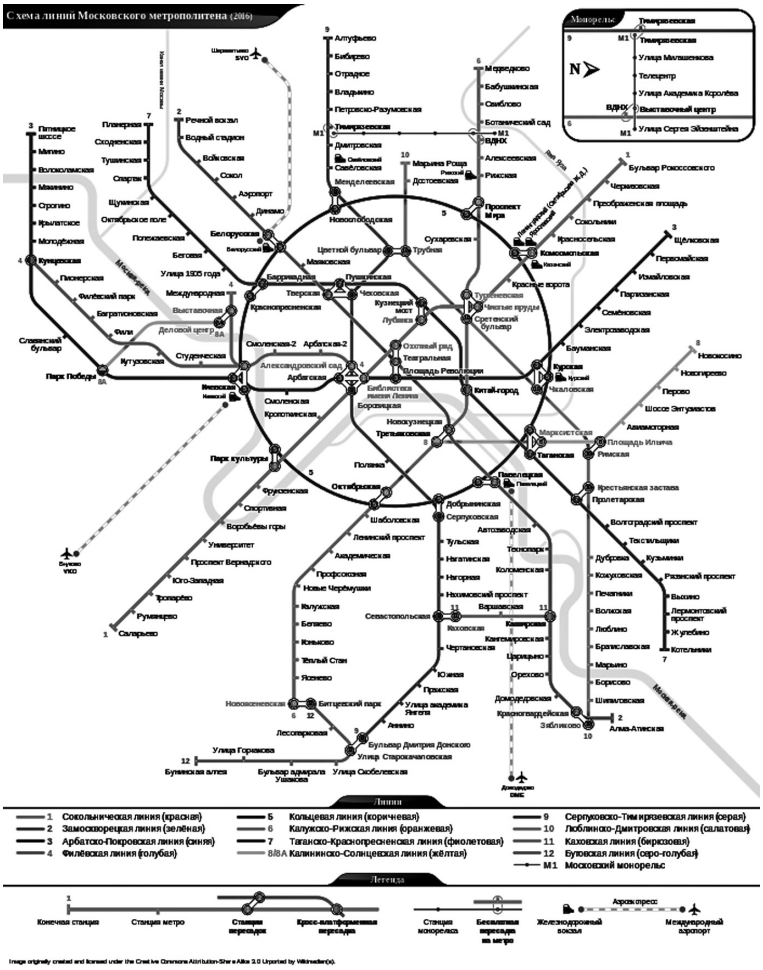
Схема линий московского метрополитена на 1 января 1962 г.

（資料：Д. Дягилев, *Москва Столица СССР 1962*, 1962）

1970年頃

（資料：Myachin, I., Chernov, V., *Moscow, Guide-book for Tourists*, 1970）

2016年現在



（資料：Wikipedia 「モスクワ地下鉄」，2016）

の地下鉄が独自であるのはその芸術性である。批判の多いスターリン体制ではあったが，彼は地下に理想の街，人民地下宮殿を建設したいと考えていた。そうした背景もあって，約200といわれる駅のうち44カ所が文化遺産に指定されるほど見事な内装となった。近年では，新駅の増設に伴い，かつてのような豪華絢爛さは見られなくなったものの，シンプルな現代アートを意識した芸術空間が引き続き導入されている。

今や公共輸送の60％近くを担い，年間輸送量世界一のモスクワ地下鉄ではあるが，近年さらに延伸目覚ましく，過密と混雑の緩和に向け，2016年９月には現在の環状線（Кольцевая Линия）を取り囲むようにして郊外にモスクワ中央環状線が完成した。

ここで，いくつかの年代別路線図を参考に，建設された駅の数の推移を見てみよう（表１）。

表に見るとおり，前世紀に始まり80年の歴史を誇る地下鉄は，その多くが社会主義政権時代に建設されたものである。駅の内装も駅名決定も，当時の政治情勢や権力者・政治家を意識して行われた。従って1991年のソ連崩壊後は，そうした時代背景も十分に意識したうえで，その成果と反省を含め，新時代にふさわしい駅名変更を行ったと考

表１　年代別地下鉄駅数の推移

路線＼年	1962年時点	1970年時点	2016年現在	備　　考
１号線	14	17	22	
２号線	9	16	22	
３号線	12	12	22	
４号線	9	13	13	３号線の延伸と一部重複
５号環状線	12	12	12	
６号線	4	15	24	
７号線	−	8	23	
８号線	−	−	10	西線２駅を含む
９号線	−	−	25	
10号線	−	−	20	
11号線	−	−	3	
12号線	−	−	7	
13号線	−	−	6	モノレール線
14号線	−	−	31	モスクワ中央環状線
計	60	93	203	13,14号線をのぞく

（別記地下鉄路線表をもとに筆者作成）

表２　地下鉄駅名の変更一覧

路線名	ソ連時代	現　　在
１号線	キーロフスカヤ駅（Кировская） ジェルジンスカヤ駅（Дзержинская） 革命広場駅　（Площадь Революции）	清池駅（Чистые пруды） ルビャンカ駅（Лубянка） 獲物街駅（Охотный ряд）
２号線	スヴェルドロフ広場駅（Площадь Свердлова）	劇場広場駅（Театральная）
３号線	レーニンが丘駅（Ленинские горы）	雀が丘駅（Воробьёвы горы）
４号線	カリーニンスカヤ駅（Калининская）	アレクサンドロフスキー公園駅 （Александровский сад）
５号線 （環状線）	ゴーリキー記念文化休息中央公園駅 （Центральный Парк Культуры и Отдыха им. Горьково）	文化公園駅（Парк Культуры）
５・６号線	植物園駅（Ботанический сад）	平和大通駅（Проспект мира）
６号線	コルホーズナヤ駅（Колхозная）	スハレフスカヤ駅（Сухаревская）
６・７号線	ノギン広場駅（Площадь Ногина） ノボクズネェツカヤ駅（Новокузнецкая）	キタイ・ゴロド駅（Китай-город） トレチャコフスカヤ駅（Третьяковская）

えられる。

その結果はどうであったか，駅名の新旧対照表を作ってみた（表２）。

この表からはいくつかの基本的な考え方，方針が見えてくる。

その第一がソ連時代の権力者・政治家の名称が外されていることだ。

まず，秘密警察の創設者で，独裁政権下における統制の象徴ジェルジンスキー（Феликс Э. Дзержинский，1877〜1926）である。ソ連崩壊時

にはKGB本部前（現・連邦保安局の本部）に建てられていた彼の銅像が引き倒された。あるいはモスクワ革命軍事委員会主席であったノギン（Виктор П. Ногин, 1878～1924），レニングラード地区の第一書記キーロフ（Сергей М. Киров, 1886～1934），革命当初から権力の中枢にいたスヴェルドロフ（Яков М. Свердлов, 1885～1919）やカリーニン（Михаил И. Калинин, 1875～1946）らが挙げられる。

驚いたことにソ連創設の父レーニン（Владимир И. Ленин, 1870～1924）の名も削られている。またロシア文学史上，社会主義リアリズムの創始者として欠かせない重要な作家ゴーリキー（Максим Горький, 1868～1936）の名も外されている。

第二には，こうした変更後の駅名は多くの場合，帝政時代の名称に戻っている点だ。清池（チースティエ・プルドィ）駅（Чистые пруды），ルビャンカ駅（Лубянка），獲物街（オホットヌイ・リャト）駅（Охотный ряд）劇場（チアトラーリナヤ）広場駅（Театральная），スハレフスカヤ駅（Сухаревская），キタイ・ゴロド駅（Китай-город）など，ソ連時代以前の帝政時代の名称に戻っている。新しい時代にふさわしい名称を新たに考えるのではなく，自らの直近の歴史・社会主義時代をなかったこととして忘却し，帝政時代の再来を願っているかのようにすら思える。

時代は移り変り，歴史認識も変っているとはいえ，帝政時代のモスクワは社会主義時代以上によかったといえるのかどうか。だが社会主義を彷彿させる人物は周到に排除されたように見える。

ところが，第三の特徴として気づくのは「レーニン図書館駅（Библиотека имени В. И. Ленина）」や「レーニン大通り（Ленинский проспект）」等はそのまま残され，健在である点だ。この判断の違いはどこから来たのかはっきりしない。

そこで，これからいくつかの地区や施設を取り上げ，19世紀から21世紀に至るここ３世紀の地区別変化と名称の推移とをまずは検証してみたい。そして直近の旧体制否定の意味と新時代建設の諸様相，あるいは旧称復活とソ連時代の名称保持との相違等を追いながら，現代の生活を通したモスクワっ子あるいはロシア人の歴史観について具体的に考えてみたい。

Ⅱ．モスクワの貧民窟：ヒトロフカ（Хитровка）

ギリャロフスキーがその本の中でまず第一に取り上げているのがヒトロフカである。モスクワの東，クレムリンからさして遠くはない地区で，モスクワ川に注ぐヤウザ川の北に位置する。これといった観光名所もないので，観光客が訪れることはまずない。筆者も今回初めて行ってみた。きっかけはギリャロフスキーの文章であった。

「都心のヤウザ川（Яуза）にほど近い低地に，漆喰の剥げ落ちた煉瓦造りの家並みに囲まれて大きな広場があり，まるで溝川（どぶがわ）が沼に流れ込むようにして，何本かの小路がそこに下っていく。（中略）……雲がどんより立ちこめるその不気味さに，はじめて訪れた者は思わず身がすくんでしまう。小路をおりると，そこはかすかにうごめく腐った穴である」（「ヒトロフカ〔Хитровка〕」）

ボロをまとった人々がうごめき，列をなしている。汚い女たちの商う食べ物は「犬の喜び（собачья радость）」と呼ばれる得体のしれない煮込みや腐ったソーセージである。ここは悪臭立ちめる貧民窟。ヒトロフ広場を囲んで木賃宿が並び，社会の底辺に生きる人々約１万人が蠢いていた。スリ，泥棒，乞食，脱走犯の巣窟であった。「その暗黒の奈落には，さすがの当局も入り込もうとはしなかった」（同章）という。

ギリャロフスキーによると，この辺りは19世紀初頭，スヴィーニン（П. П. Свиньин）という有

ポドコロコリヌィ・ペレウーロック
鐘 楼 横 町

ウーリツァ・ソリヤンカ
塩 倉 通 り

ヒトロフ広場の表示板

現在のヒトロフ広場

名人の持ちものであった。当時から広い荒れ地で浮浪者のねぐらにもなっていたが，その一角に，少将であったヒトロヴォ（Н. П. Хитрово）が大きな別邸を持ち，大勢の召使たちがその別棟に住んでいた。それでこの敷地にヒトロフ市場が出来上がったのである。ところがスヴィーニンの死後，この敷地と屋敷はラストルグーエフ（Расторгуев）という商人一家の手に渡った。しかしこの「放任地（больное место）」は全く手つかずであった。そのためますます荒廃を極め，結局彼の所有が1917年の10月革命まで続くこととなった。この間ヒト

ヒトロフカ：無料給食場，1917年
（「ギリャロフスキーの家」前の展示パネルを筆者撮影）

ヒトロフカの木賃宿（当時）を偲ぶ

ロヴォ将軍の館は養育院に，ついで技師ロメイコ（Ромейко）にと転売された。ところがロメイコは，高額な修理費の捻出や，また場所柄からの賃貸の難しさから，そのまま木賃宿として貸し出すことにしたのである。ここから件（くだん）のすさまじいばかりの貧民窟が出現し，数十年間にわたりモスクワっ子を震え上がらせたのであった。

この辺りは隣接して，商取引のある街並み・塩倉（ソリャンカ）通り（Солянка）や外国人を含む裕福な商人の邸宅が並ぶ聖守護（ポクロフスキー）並木通り（Покровский бульвар）があるだけに，近隣の大邸宅の持ち主は何度もこれを一掃しようと試みた。しかしいずれの方策も複雑な利害関係や政治的取引のため徒労に終わり，結局大手術は社会主義政権によって行われたのであった。ギリャロフスキーはこう書いている。

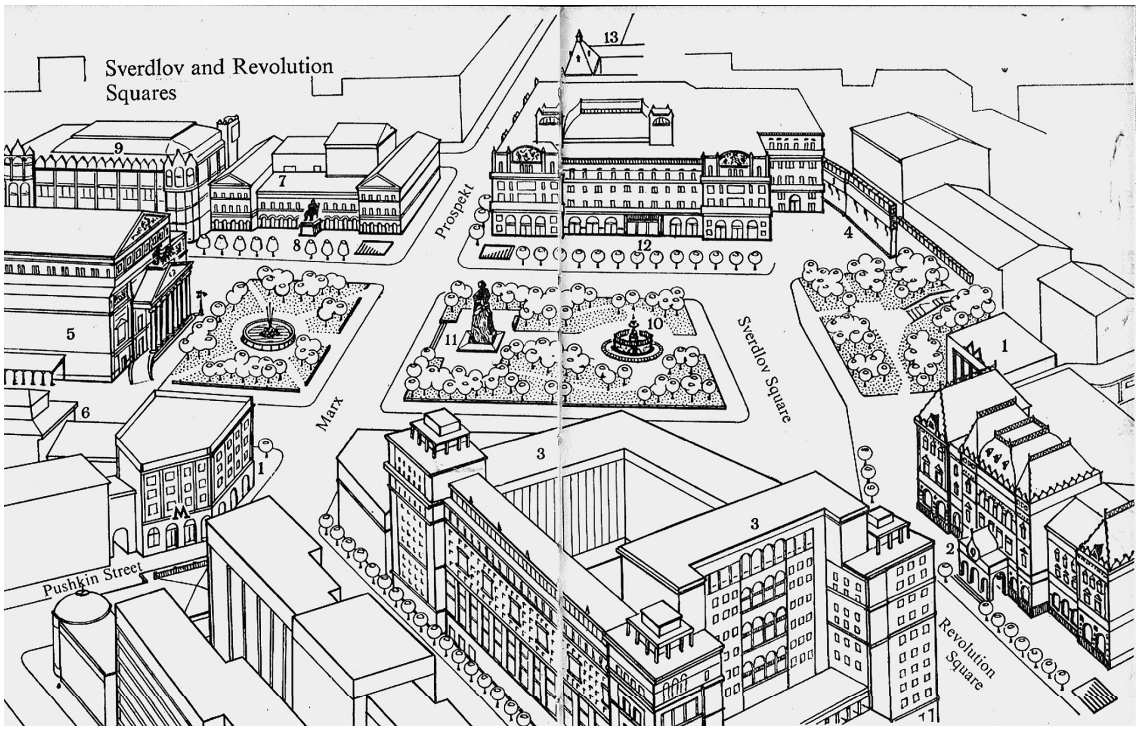
「旧体制時代の不治の癌が取り払われたのは，ソヴィエト政権になってからだ。1923年，モスクワ市議会（Моссовет）が出したたった一つの法令によって，全広場とひしめく長年の悪の巣窟は，わずか一週間で一掃された。さらに数か月のうちに，つい先頃まで貧民窟だった建物は清潔なアパートに改造され，労働者・勤労者が住みこんだ。……最大の貧民窟“クラコフカ”は根こそぎ取壊され，新たに建て直されたのである。まえとそっくりの家並みで，ただし外観は清潔に……」（同章）

今回初めてヒトロフカを訪れたが，街並みは清潔で，高級感はないものの，庶民が住む小さな住宅商業地区として落ち着いた佇まいであった。とりどりの色が溢れる円い花壇の広場に立って，当時とおそらくは同じ構えであろう２階建ての古びたアパート（クラコフカか？）を眺めていると，喧騒こそ蘇っては来なかったものの，いくつかの看板や表示から往時の惨状を偲ぶことができた。この変貌した光景を見ていると，革命のエネルギーがもたらした産物は，単なる政体の変革だけではなく，長年の不可能事を一挙に覆す思い切った荒療治でもあったと実感した。

Ⅲ．市の心臓部分：獲物街・キタイの壁

市の心臓部分，クレムリンの北側に位置する地域には，歴史的な建造物や人々の営みの歴史がぎっしりと詰まっている。建物こそ石造りで大きな変化はないように見えるが，そこに住む住人や建造物の使われ方はこの３世紀で大きく変わった。クレムリンに近いからといって決して高級な店や

図1　1970年代のスヴェルドロフ広場（現・獲物街（オホットヌィ・リャト））・革命広場界隈の名称の変遷



（資料：Myachin, I., Chernov, V., *Moscow, Guide-book for Tourists*, 1970）

	帝政時代（19世紀）	ソ連時代（20世紀）	現　　代（21世紀）
1	獲物街地（Охотный ряд）	スヴェルドロフ広場駅（Площадь Свердлова）	獲物街（Охотный ряд）駅，劇場広場（Театральная площадь）駅
		革命広場（Площадь Революции）駅	革命広場（Площадь революции）駅
2	—	レーニン博物館（Центральный музей В. И. Ленина）	1812年祖国戦争博物館（Музей Отечественный Войны 1812 Года）
3	獲物街地（Охотный ряд）	ホテル「モスクワ」（Гостиница Москва）	フォーシーズンズ・ホテルモスクワ（Four Seasons Hotel Moscow）
4	キタイゴロドの壁（Китайская стена）	キタイゴロドの壁（Китайская стена）	同左
5	ボリショイ劇場（Большой театр）	ボリショイ劇場（Большой театр）	同左
6	—	子ども劇場（Детский театр）	ロシア青年劇場（PAMT（ラムト））（Российский Академический Молодежный Театр）
7	マールィ劇場（Малый театр）	マールィ劇場（Малый театр）	同左
8	A・オストロフスキー像（A. Островский）	A・オストロフスキー像（A. Островский）	同左

9	同右	中央百貨店（ツム：ЦУМ）	同左
10	イヴァン・ヴィタリ（Иван П. Витали; 1794～1855）による噴水	イヴァン・ヴィタリによる噴水	同左
11	―	カール・マルクス（Karl H. Marx）像	同左
12	ホテル「メトロポール」（Гостиница Метрополь）	ホテル「メトロポール」（Гостиница Метрополь）	同左
13	イヴァン・フョードロフ（Иван Фёдоров）像	イヴァン・フョードロフ（Иван Фёдоров）像	同左
通りの名称	劇場小路（Театральный проезд）	マルクス通り（Проспект Маркса）	劇場小路（Театральный проезд）
	ボリシャヤ･ドミトロフカ通り（Улица Большая Дмитровка)	プーシキン通り（Пушкинская улица）	ボリシャヤ･ドミトロフカ通り（Улица Большая Дмитровка）

住人ばかりが並んでいたわけではない。

例えば「キタイゴロド（Китаи-город）」がそうだ。

ギリャロフスキーによると，キタイの壁（Китайская стена）とはモスクワのクレムリンを取り囲む内城地区（キタイゴロド〔Китай-город〕）と外城地区（白ゴロド〔Белый-город〕）を仕切る壁のことで，16世紀半ばに築かれた。

ところが18世紀の初めには，このキタイゴロドの壁は店や売店の進出，さらに勝手気ままな穴倉や倉庫，物置，厩舎の設置によって大変な状況になっていた。その混乱ぶりに拍車をかけて，汚水が充満し，汚物が悪臭を放っていたという。

その惨状は作家ゴーゴリ（Николай В. Гоголь, 1809～1852）が『検察官』（“Ревизор”）の中で，この界隈のことを「堀のそばにはごみ芥が荷馬車40台分も捨てられている。なんていやらしい街だ（Возле того забора навалено на сорок телет всяко госора. Что за скревный город）」と言わしめるような状況であった。

「その後，1812年戦争（訳注：ナポレオンのモスクワ侵攻のこと）直後，この壁は可能な限り整理された。外側の建物は取り払われ，内側はそのままにして，イリヤ門（Ильинские борота）とニコラ門（Никольские борота）との間にある旧広場（Старая площадь〔現･新広場：Новая площадь〕）に古物市場が開かれた。（中略）古物市場（толкучика）はやっと80年代に閉鎖されたものの，その痕跡は残されたまま，街のど真ん中に貧民窟が生きており，これを一掃したのはソヴィエト政権であった」（「キタイゴロドの壁〔Под Китайской стеной〕」）

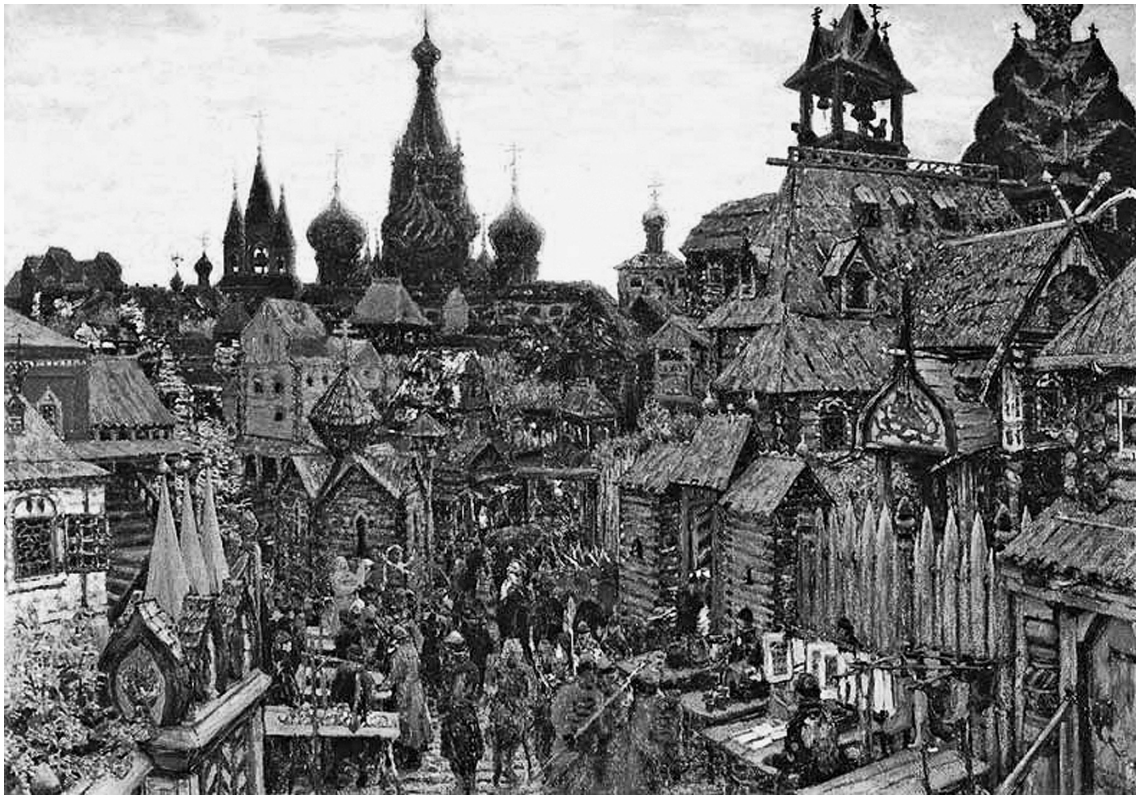
今も何カ所かにその壁の址が残っており，さらに観光資源としてその修復工事も一部行われているものの，帝政時代の実情はヒトロフカ同様，決して懐かしく回顧できるような代物ではなかった。そして1934年にこれを一掃したのもソヴィエト政権であった。その上，現在進められている遺跡修復も，当時の行政がいち早く始めている。

「1926年，公共事業省整備局（отдел блогоустройства МКХ）は古いモスクワの記念碑であるキタイゴロドの壁を修復した――それは500年前に外敵の侵入を防いだものであって，実は後代が目にしたようなものではなかったのだが」（同章）

もう一つ大きな変化，画期的な大変身がある。超近代的な地下街を出現させた「獲物街（Охотный ряд）」，「劇場広場（Театральная площадь）」の各駅界隈である。

現在の地下名店街・獲物街（オホットヌィ・リャト）入り口

19世紀末の獲物街
（資料：http://moskvaweb.ru/2016）



ヴァスネッツォフ画「17世紀のキタイゴロドの通り」
（Бикипедия: китаи город, 2016）

ソ連時代はそれぞれ「マルクス大通り（Проспект Маркса）」，「革命広場（Площадь Революции）」，「スヴェルドロフ広場（Площадь Свердлова）」と呼ばれていた。地下でつながっており，それぞれ路線の違いで名称が違っていた。今もその構造に違いはない。

ただし，1970年代は，地下に簡便なキオスクや小物店はあっても，今日のような巨大なブランドショップや高級店が軒を連ねて広がるショッピングモールはなかった。資本主義社会の力であろう。

では帝政時代の「獲物街」はどういう状況であったのか。再びギリャロフスキーに聞いてみよう。

残存するキタイの壁

「獲物街はモスクワの胃袋（чрево）である。その昔獲物街は，片側に古い家が立ち並び，片側には数十人の家主の平長屋が一つ屋根の下に住んでいた。そのうち住居として使われていたのは２軒のみ，ホテル「コンチネンタル（Континенталь）」とそれに隣接する“ブリン（блин）”（訳注：ロシヤ風クレープ）で有名な「エゴーロフ居酒屋（трактир Егорова）」だけであった。あとはトヴェリ大通り（Тверская）まですべて小店が並んでいた」（「モスクワの胃袋〔Чрево Москвы〕」）

獲物街はその名が示す通り，狩猟してきた動物や鳥を商う店が中心で，それに伴いありとあらゆる食品が軒を連ねて販売されている市場であった。肉屋と魚屋は２区画に分かれ，高級品とそうでない品とがそれぞれ販売されていたが，どの店にも地下室があって腐臭を放っていた。「ここでは清潔（чистота）という言葉ははやらなかった。」（同章）

ギリャロフスキーは1880年代の獲物街の実態に関する保健衛生検査の調書を引用しているが，それはすさまじいものだ。「肉屋については容認しうるのは外見のみにて，客の目に触れざる内部は劣悪極まりし。」という文章に続き，物置小屋（палатки）は鶏舎と化し，屠殺の後片付けもないままで，毟られた羽や血痕，糞尿，塵埃は放置されたまま。使った用具も洗われた形跡すらなく，部屋は耐え難い悪臭を発して不潔極まりない，と書かれている。造幣局（Монетный двор）と呼ばれる中庭にはゴミ捨て用の穴があけられ，動植物

の腐った屑が山積みになっている。屠殺場の建物には胸の悪くなるような悪臭が沁み込み，内臓や血をはじめとする市場から出たあらゆる汚物は，ゴミ捨て場から許可なく市の下水道へ捨てられ，浄化もされずモスクワ川に流されていく。こうした「筆舌に尽くしがたい」（выше всякого описания）不潔物の惨状が詳細に報告されている。

この報告書は一大事件となった。早速市議会で取り上げられ大議論となったが，ある議員が「バクテリア（бактерия）」という言葉を「バフテリア（бахтерия）」と言い間違えたばかりか，それを「ねずみ（крыса）」のことと勘違いして一席ぶった演説が笑い嘲となったことも与り，すぐさま一斉に大清掃が行われることとなった。どの店も猫を飼うことが義務付けられたものの，一匹の猫がねずみに食われてからというもの，どこの店も飼い猫を倉庫の中には入れなくなってしまった。そこでフォックステリヤ犬がネズミを捕るというので，どこもこれを飼い始め，ようやくねずみ退治は終了したのであった。

こんなエピソードに事欠かない獲物街の店々が一斉に取り払われたのも，革命後であった。その跡地には11階建てのホテル「モスクワ（Москва）」が建てられたのである。

かくして1970年代のモスクワ市心は図1のようになった。

そして今日，名称こそ入れ替わったものの，ほとんどの建物は当時と変わっていない。この界隈の彫像はマルクス像を含め，劇作家・オストロフスキー（Александр Н. Островский, 1823～1886）像，ロシア印刷術の創始者イワン・フォードロフ像（Иван Фёдоров, 1510～1583）――これらは現在も維持されている。旧来からの諸劇場，メトロポールホテル（Гостиница Метрополь），その東側のキタイゴロドの壁，昔の噴水等すべて健在だ。

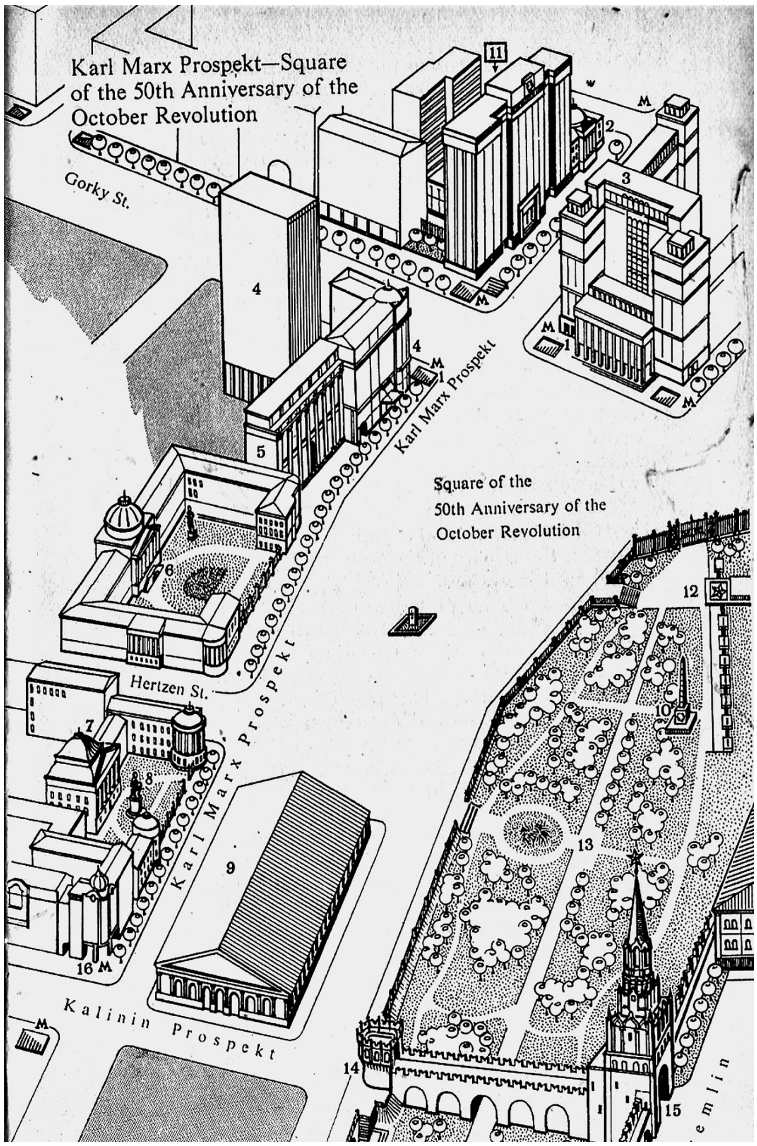
アレクサンドロフスキー庭園（Александровский сад）も整備が進み充実したが，基本はもとのまま。ただ公園ゆかりのアレクサンドル1世（Александр П. Романов, 1777-1825）の彫像が2014年に新たに建立されたのが目につく。またよく反乱と洪水を起したネグリンナヤ川の治水工事を記念してか，往時の通気柵枠が青銅の碑として建てられたり，ネグリンナヤ河床の流れのミニチュアが再現されたりしていたのも興味深かった。なぜならわがギリャロフスキーが，劇場前をよく水浸しにしたネグリンナヤの水害についてわざわざ一章を割いているからである。

「その頃，水路広場（Трубная площадь）とネグリンカ小路（Неглинный проесзд）は，大雨が降るたびに鍛冶橋（Кузнецкий мост）の近くまで水があふれた。（中略）原因は未だかつて掃除をしたことのないネグリンカ川の暗渠にあった。それは緩流広場（Самотёка）から花売並木通り（Цветный бульвар），ネグリンカ小路や劇場広場（Театральная площадь），さらにはアレクサンドルフスキー公園の下を通り抜け，モスクワ川に通じていたが，雨の日には溢れる水を処理しきれなかった。これは明らかなる災厄であったが，『町の長老たち（отцы города）』は一顧だにしなかった。」（「ネグリンカ川の秘密〔Тайны Неглинки〕」）

ギリャロフスキーによると，ここにはかつてネグリンカという小川が流れていたが，エカテリーナ女帝の時代には地下の管におさめられた。つまりきちんと雨水や家庭汚水のための下水道が敷設されたのである。ところが金持ちの大半は汲み取りを嫌って，こっそりとこの川に屎尿下水管を敷いたのである。これは本格的な下水施設ができるまでは本来してはならないことであった。そんなことは誰もが承知していたが，警察や市会議員も自分事とは思わず放置していたのである。

そこで好奇心の塊で義侠心の強いギリャロフス

図２　1970年代の十月革命50周年記念（現・マネジ）広場とアレクサンドルフスキー公園界隈の名称の変遷

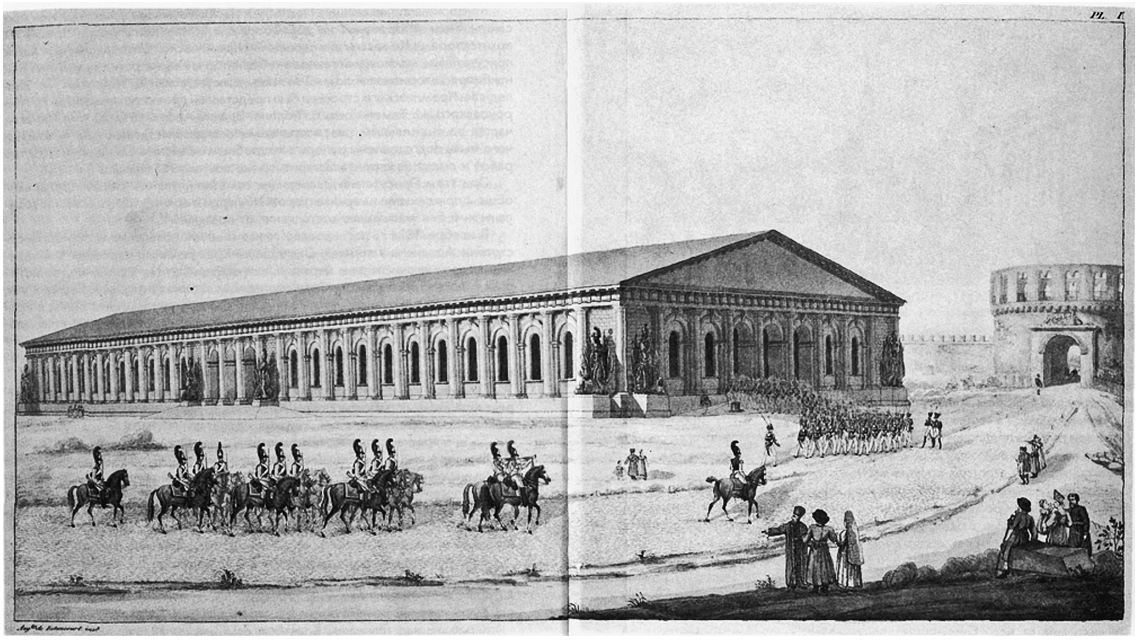


（資料：Myachin, I., Chernov, V., *Moscow, Guide-book for Tourists*, 1970）

キーは，水道工と梯子掛けの助手とを雇って，地下壕に潜り込むのである。その詳細は引用を割愛するが，暗渠の実情を仔細に報告した新聞記事はセンセーションを巻き起こした。市議会はネグリンカ改修工事を決定し，直ちに実施された。工事進行中，ギリャロフスキーは再度マールイ劇場（Малый Театр）前の暗渠に潜る。そして洪水の原因がこの場所にあることを発見する。ここで川が曲がっていて，ゴミが堆積し，水はかろうじてその上を流れていたのである。かくして1886年，ネグリンカ暗渠改修工事は終了する。

ところがそれから数十年後，暗渠から再び泥と汚物が溢れ出す。場所はやはりマールイ劇場付近の曲がり角，第一次世界大戦中の洪水はことにひどく，店舗や住宅の一階は水浸しになった。だが市議会は今度も拱手傍観，手立ては全く打たれな

	帝政時代（19世紀）	ソ連時代（20世紀）	現代（21世紀）
1	獲物街 （охотный ряд）	マルクス大通り（Проспект Маркса）駅	獲物街（охотный ряд）駅
2	貴族会館 （Дом Благодорного собрания）	労働組合会館（Дом Союзов）	組合会館（Дом Союзов） ：コンサートホール他
3	獲物街（охотный ряд）	「モスクワ」ホテル （гостиница “Москва”）	「フォーシーズンズ」ホテル （Hotel “Four Seasons Moscow）
4	ホテル「ナショナル」 （гостиница “Национаь”）	同左	同左
5	—	「インツーリスト」本社 （Интурист）	同左（？）
6・7	モスクワ大学旧館 （МГУ/ старое здание）	同左	同左
8	ロモノーソフ像 （М. В. Ломоносову）	同左	同左
9	馬場（Манеж）	中央展示場 （Центральный выставочный зал）	同左（Манеж）
10	—	革命思想家記念オベリスク （обелиск）	同左
11	—	グリンカ音楽博物館 Центральный Музей Музыкальной Культуры им. М. И. Глинки	移転 （1985年，マヤコフスカヤ駅付近へ）
12	—	無名戦士の墓 （Могила Неизвестного Солдата）	同左
13	アレクサンドロフスキー公園 （Александровский сад）	同左	同左
14	クタフィヤ塔 （Ктафия башня）	同左	同左
15	トロイツキー塔 （Троицкая башня）	同左	同左
16	—	レーニン図書館駅 （Библиотека им. Ленина）	同左
通り・広場等	モホーヴァヤ通り （Моховая Ул.）	マルクス大通り （Проспект Маркса）	モホーヴァヤ通り （Моховая Ул.）
	マネージ広場 （Манежная пл.）	10月革命50周年記念広場 （Октябрьская пл.）	マネージ広場 （Манежная пл.）
	トゥヴェルスカヤ通り （Тверская ул.）	ゴーリキー通り （Ул. Горького）	トゥヴェルスカヤ通り （Тверская ул.）
	ヴォズドヴィジェンカ通り （Воздвиженка ул.）/新アルバート通り（ул. Новый Арбат）	カリーニン大通り （Прспект Калинина）	ヴォズドヴィジェンカ通り （Воздвиженка ул.）/新アルバート通り（ул. Новый Арбат）
	大ニキッツカヤ通り （Большая Никитская ул.）	ゲルツェン通り （ул. Герцена）	大ニキッツカヤ通り （Большая Никитская ул.）



19世紀初め，帝政時代のマネジ（манеж：馬場）。今は中央展示場
（資料：https://ru.wikipedia.org/wiki/ Московский Манеж. 1817頃）

アレクサンドルフスキー庭園の噴水

かった。

ようやく本格的な改修が実施されたのは革命後の1926年，モスクワ市議会（Моссовет）であった。

こんなエピソードを思い起こしながら，ネグリンナヤの暗渠の上，庭園に新たに作られた噴水を見る。元気に後脚で立ち嘶く馬の青銅像の前に，かつてでは考えられないようなきれいな水がいくつも高く噴き上げられる様子を飽かず眺めた。

さて，この界隈の変わったもの，変わらぬものをみてきたが，さすがに「レーニン博物館（Центральный музей В. И. Ленина）」はナポレオン戦争を展示する「1812年祖国戦争博物館（Музей Отечественный Войны 1812 Года）」になり，1930年代に建てられ老朽化著しかった「ホテル・モスクワ（Гостиница Москва）」が「フォーシーズンズ・ホテル・モスクワ（Four Seasons Hotel Moscow）」に代わった。このビルはホテルと併設された商店コンプレックス（Торговая Галерея “МодныйСезон”）になっている。

一方，メトロポールホテル同様，歴史を誇るホテル「ナショナル（Национаь）」は改修を終えて，ラグジュアリ・ホテルに蘇った。1970年代に建てられたそのアネックス・ホテル「インツーリスト（Интурист）」は取り壊され，リッツ・カールトン・モスクワ（The Rits-Carlton Moscow）となった。モスクワのホテルの多くが外資系になったのも時代の趨勢なのだろう。

通りの名前は，「マルクス通り」が「苔売り（モホバヤ）（Моховая）通り」，「劇場通り」と「獲物街通り」に戻り，「プーシキン（Пушикинская）通り」も「大ドミトロフカ（Большая Дмитровка）通り」に戻った。

「10月革命50周年記念広場（通称・Октябрьская площадь）」も「マネジナヤ広場（Манежная площадь）」に戻った。ここにある中央展示場は今もそのままの用途で使われているが，19世紀には宮廷士官の練習に使われた屋内馬場（манеж）を偲ばせる名称が蘇った。社会主義時代前史への郷愁がほの見えるが，一方で「革命広場（Площадь Революции）」はそのまま維持された。マルクス像の保持とも関係がありそうだが，背景は不詳である。

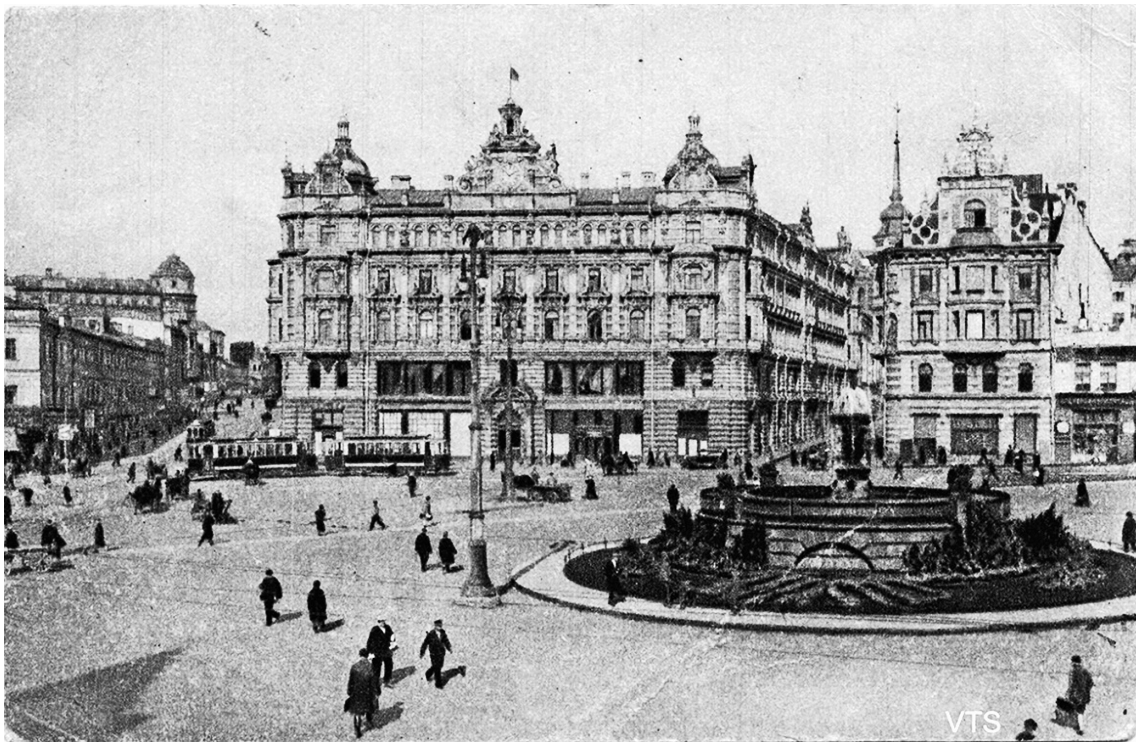
Ⅳ．秘密警察と公安の砦：ルビャンカ（Лубянка）界隈

一方，様相が大きく変わったのは旧・ジェルジンスキー広場，現・ルビャンカであろう。

前述の通り，ジェルジンスキーはソ連秘密警察の創設者で，独裁政権下における統制の象徴ともいえる存在であった。それゆえ，ソ連崩壊時にはKGB本部前（現・連邦保安局の本部）に建てられていた彼の銅像が引き倒されたのも理解出来る。ただこの像を中心にロータリーとなっているこの広場は，その歴史を見る限り暗部の深さはソ連時代だけではなさそうだ。

そもそもここは古くからルビャンカ（Лубянка）と呼ばれる広い馬車の駐輪所であった。ルビャンカとは樹皮（луб）で作った籠や箱のことで，樹皮小屋広場とでもいったほどの意味である。1880年代当時，モソロフ（Н. С. Мосолов）という富裕な地主の邸宅が建っており，その前が辻馬車の集まる場所になっていた。

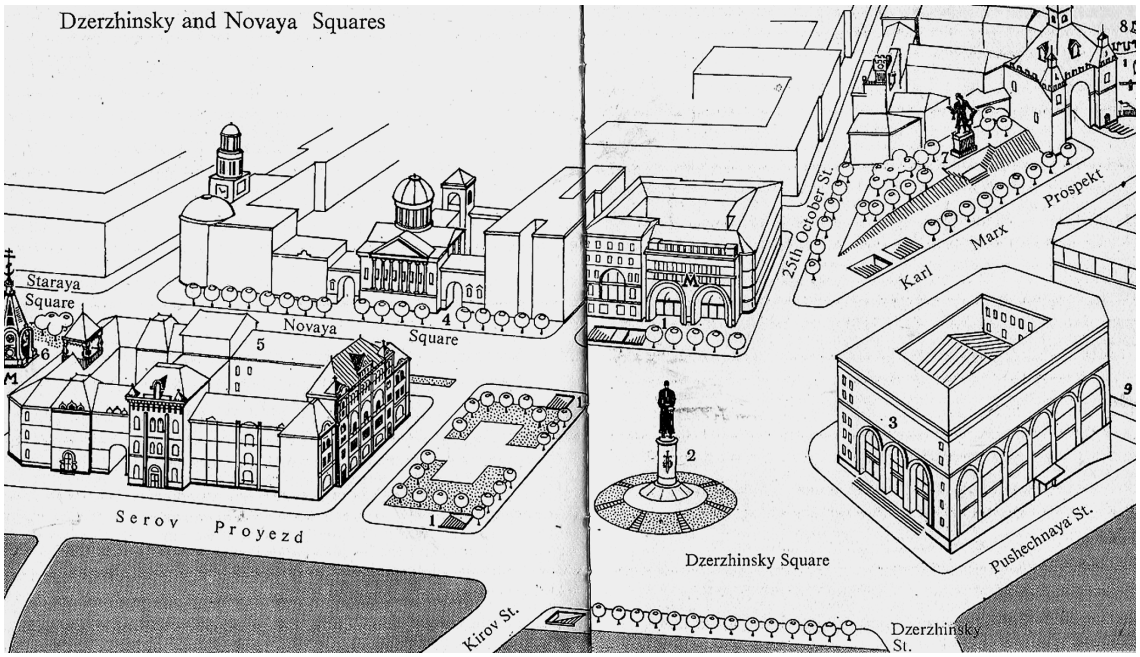
「…ルビャンカ広場は，まさに辻馬車置き場の中庭になっていた。モソロフの家と噴水の間は箱馬車の駐車場，噴水とシーポフの家の間は荷馬車の駐車場で，肉屋屋通り（Мясницкая）から大樹皮小屋通り（Большая Лубянка）までの歩道沿いには馬の周りにたむろする乗用辻馬車の御者がずらりと隙間なく並んだ。（中略）馬は馬銜（はみ）を外され，秣（まぐさ）袋をかぶされ，餌を食べさせられていた。



20世紀初頭の「保険会社ロシア」（1898年建造）
（資料：http://vitale2.livejournal.com/47148.html）

現在のロシア連邦保安庁（ФСБ，旧КГБ）（1947年，Ａ・シューセフ（А. В. Щусев）による建造
（区画そのままがビルなので４階建だが威圧感がある）

図 3 ：1970年代のジェルジンスキー広場（現・ルビャンカ）界隈の名称の推移



（資料：Myachin, I., Chernov, V., *Moscow, Guide-book for Tourists*, 1970）

現在のロシア連邦保安庁（画面左）とルビャンカ広場（銅像が撤去され花壇になっている）

（資料：http://www.lonelyplanet.com/news/2015/06/25// Image by AP Photo/Alexander Zemlianichenko.）

	帝政時代（19世紀）	ソ連時代（20世紀）	現　　代（21世紀）
1	ルビャンカ広場（Лубянка）	ジェルジンスキー駅 （Держинская）	ルビャンカ駅（Лубянка）
2	噴水	ジェルジンスキー像 （Ф. Дзержинскому）	撤去―（花壇）
3	―	百貨店「子供の世界」 （Детский Мир）	同左（分館）
4	―	モスクワ歴史博物館（Музей истории города Москвы）	同左
5	―	工業技術博物館 （Политехнический музей）	同左
6	―	ノギン（Ногин）駅	キタイゴロド（Китай город）駅
		プレヴナ戦没慰霊碑 （Бои за Плевну в 1877 г.）	同左
7	同右	イヴァン・フョードロフ像 （И. Фёдрову）	同左
8	同右	キタイゴロド城壁遺跡 （Китай город）	同左
9	ホテル「ベルリン」（1912） （Гостиница “Берлин”）	ホテル「ベルリン」 （Гостиница “Берлин”）	「サヴォイ」ホテル（Savoy）
広場・通りの名称	新広場（Новая площадь）	新広場（Новая площадь）	同左
	ルビャンスキイ小路 （Лубянский проезд）	セロフ小路 （Серовский проезд）	ルビャンスキイ小路 （Лубянский проезд）
	劇場小路 （Театральный проезд）	マルクス大通り （Проспект Маркса）	劇場小路 （Театральный проезд）
	ニコリスカヤ通り （Никольская улица）	10月25日通り （Улица 25го Октября）	ニコリスカヤ通り （Никольская улица）

/ 車道には，歩道沿いに食べ残した干草が散らばり，馬の糞や尿が流れていく」（「樹皮小屋広場〔Лубянка〕」）

そんなルビャンカに1890年代，保険会社ロシア（Россия）が土地を買い占め，大きな建物を建て始めた。膨大な資金を不動産に変えようと考えたのだ。それがモソロフの地所に建った巨大なアパートであった。新しいアパートは住み心地がいいと見えて，例外なく長いこと「…住み心地のよさと静けさを愛する，あまり豊かでないおとなしい人たちが住んだ」。（同章）

ところがこの近くに「恐怖の家（дом ужасов）」と呼ばれる建物があったのだ。

「主教管区監督局（Консистория）」と下宿「肉屋通り（Мясницкие）」との間に，役人のアパートになっていた実に古い３階建ての建物があった。これがかつての恐怖の館なのである。」ギリャロフスキーによると，エカチェリーナ２世（Екатерина II Алексеевна, 1729～1796）の信任厚い大審問官で，秘密憲兵隊長であったシェシコフスキー（С. И. Шешковский）がかつて住んでおり，この部屋で逮捕者の拷問が行われたというのだ。吊るし鉤や鎖，地下牢があり，大勢が幽閉されていた。のちになってパーヴェル１世（Павел П. Романов, 1754～1801）が恩赦を出した時，ここから引き出された者の多くはすでに気が狂っていたという。また20世紀初頭，この建物がとり壊された時，鉄

張りの樫の扉の付いた部屋が見つかり，鎖につながれた人骨が出てきた。1923, 4 年には下宿「肉屋通り（ミャスニツキエ）」のあった場所に商店が建てられたが，その地下で隣の秘密探偵局（Тайный приказ）の牢獄と思しき部屋が見つかったという。

そんな歴史とエピソードのあるルビャンカ――保険会社ロシアの建物がソ連時代には KGB（КГБ：ソ連国家保安委員会）本部として使われ，広場の真ん中にあった噴水に代わって，13メートルもあるジェルジンスキーの像が建てられていた。ソ連崩壊に伴って像は引き倒されたが，この建物は今も新生ロシアの FSB（ФСБ：ロシア連邦保安庁）としてそのまま使われている。年々その陣容は強化され，かつての KGB に近づいているともいわれる。

ジェルジンスキー像に代わる銅像はまだ建てられてない。今は花壇が整備され，ルビャンカのロータリーには自動車が行き交っている。ほかのどの広場より大きく見えるが，実はこの地に関する都市伝説がある。それは「この広場に大きな建物は建たない，なぜなら地下には巨大な地下室が張り巡らされているからだ」というものである。あくまでも都市伝説ではあるが，上述のエピソードを見ても，あるいは KGB から続く「ロシア連邦大統領特殊プログラム総局（ГУСП）」が地下シェルター等の特殊施設の建設・運営・維持を担当する機関であることを考えると，あながち都市伝説とばかりは言い切れまい。

かくしてビャンカはいまなお連綿たる治安取締りの歴史の広場なのである。

Ⅴ．温水プール跡地に出現した大聖堂：クロポトキン（Кропоткинская）駅界隈

ソ連時代のモスクワを知っているものにとって，大きく様変わりした景観はいくつかある。

その一つがクレムリンの東側，赤の広場に隣接していた当時世界最大級の21階建ホテル「ロシア（Россия）」の消滅であろう。1960年代後半，フル

ロシアホテル
（Wikipedia「ロシアホテル（2017）」）

シチョフ（Н. С. Хрущёв, 1894～1971）の命により建設されたこの3000室を超える巨大ホテル・コンプレックスは，2006年，再開発のため，2500席の中央コンサートホールを除いて取り壊された。今は新たな複合娯楽施設開設へ向け工事が進んでいる。

こちらが「消滅した巨大な景観」だとすれば，もう一つは突如「出現した巨大な景観」であろう。こちらはクレムリンの南西，モスクワ河畔に立つ救世主ハリストス大聖堂（Храм Христа Спасителя）である。最寄りの地下鉄駅はクロポトキンスカヤ駅（Кропоткинская）である（ちなみに無政府共産主義者・クロポトキン（Пётр А. Кропоткин, 1842～1921）の名はそのままである。あるいは反ボリシェビキであったからかもしれない）。

ソ連時代はここに巨大な露天の温水プールが設置されており，真冬も立ちこめる湯気の中，市民が利用していた。プールは直径129m の円形をなしており，井桁のようにして橋がかけられ，50m 直線コースが６つあった。大きさは東京ドームほどである。オープンが1960年であるから，大聖堂再建のなる2000年まで，40年間市民に親しまれてきたことになる。それがソ連崩壊後とり壊され，跡地に大聖堂が70年ぶりに蘇ったのである。

もともとこの大聖堂は，1812年の祖国戦争（ナポレオン戦争）の戦勝記念と戦没者慰霊のため，アレクサンドル一世（Александр П. Романов, 1777～1825）が決めたものであった。しかし敷地予定の雀が丘（Воробьёвы Горы）の地盤が軟弱で工事は中止，アレクサンドル一世の後を継いだニコライ１世（Николай П. Романов, 1796～1855）によって1839年，現在の地に工事は再開され，44年もの歳月をかけて1883年，アレクサンドル３世（Александр А. Романов, 1845～1894）の戴冠式の日に完成した。

ところが，周知のようにソヴィエト政権は宗教弾圧政策をとっており，ロシア正教会に対して，冠婚葬祭の禁止，教会施設の接収や破壊，聖職者らの逮捕・処刑といった激しい弾圧をとり続けていた。一方のロシア正教会側は帝政時代から帝権と自らの存立・信仰とを峻別しており，その姿勢は革命後も変わらなかった。このことは「宗教をアヘン」とみなすソヴィエト政権にとっては脅威であった。そこで無神論イデオロギーの宗教に対する勝利を印象付けるべく，象徴的なこの大聖堂を爆破しようと考えたのである。決定したのはスターリン（Иосиф В. Сталин, 1878～1953）であった。

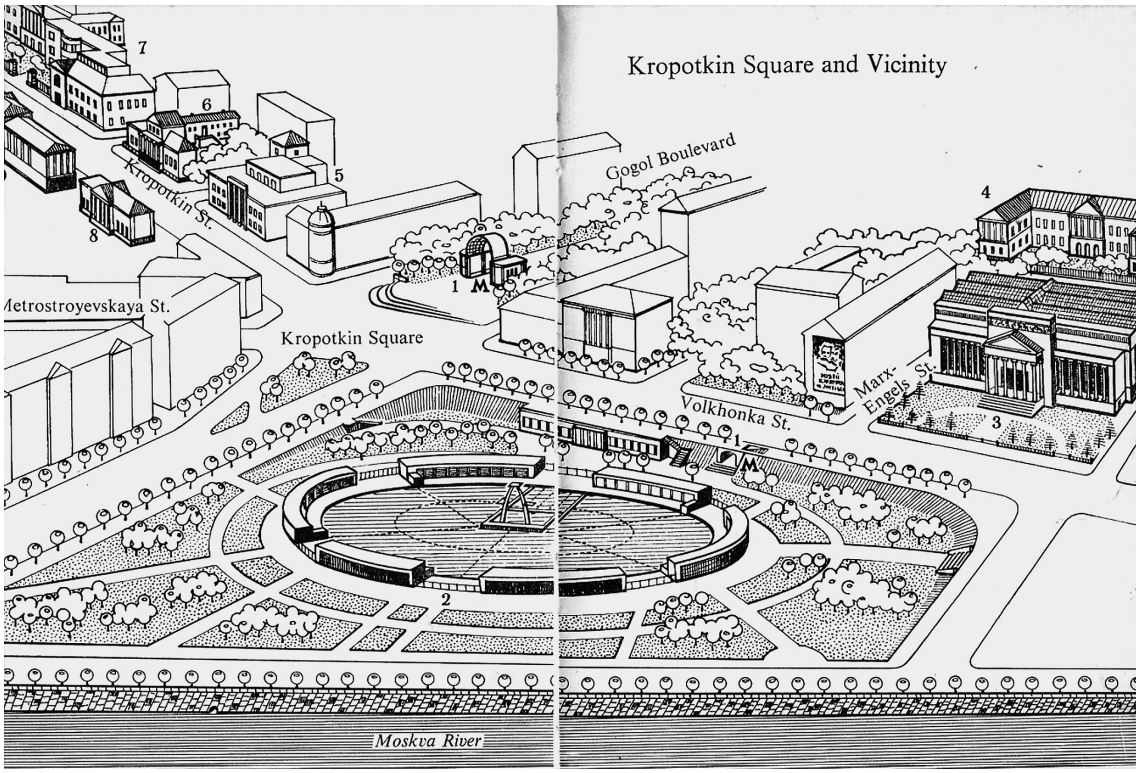
以前から，ソヴィエト新政権樹立を記念する記念碑的な建造物を建てる計画はあったが，その具体化は1930年代に入ってからであった。スターリンは「ソヴィエト大宮殿」の建設計画を発表，高さ約500m 弱の当時としては世界一高いビルで，いわば「人民の宮殿」，新生ソヴィエト政権の代表者が集まる党大会会議場の予定であった。その敷地を大聖堂跡地としたのは，帝政ロシアとロシア正教に対するアンチテーゼであったといえよう。そして1931年12月，大聖堂は爆破されたのである。

その後，工事は始まったものの，軟弱な土壌という問題，第２次世界大戦による中断等もあって

跡地に建設されるはずであったソヴィエト宮殿（高さ415m，トップは100m のレーニン像。1933年発表，工事難航のため1950年代に中止）

（資料：PABOUK，2017）

図 4　1970年代のクロポトキン広場とその近郊の変遷

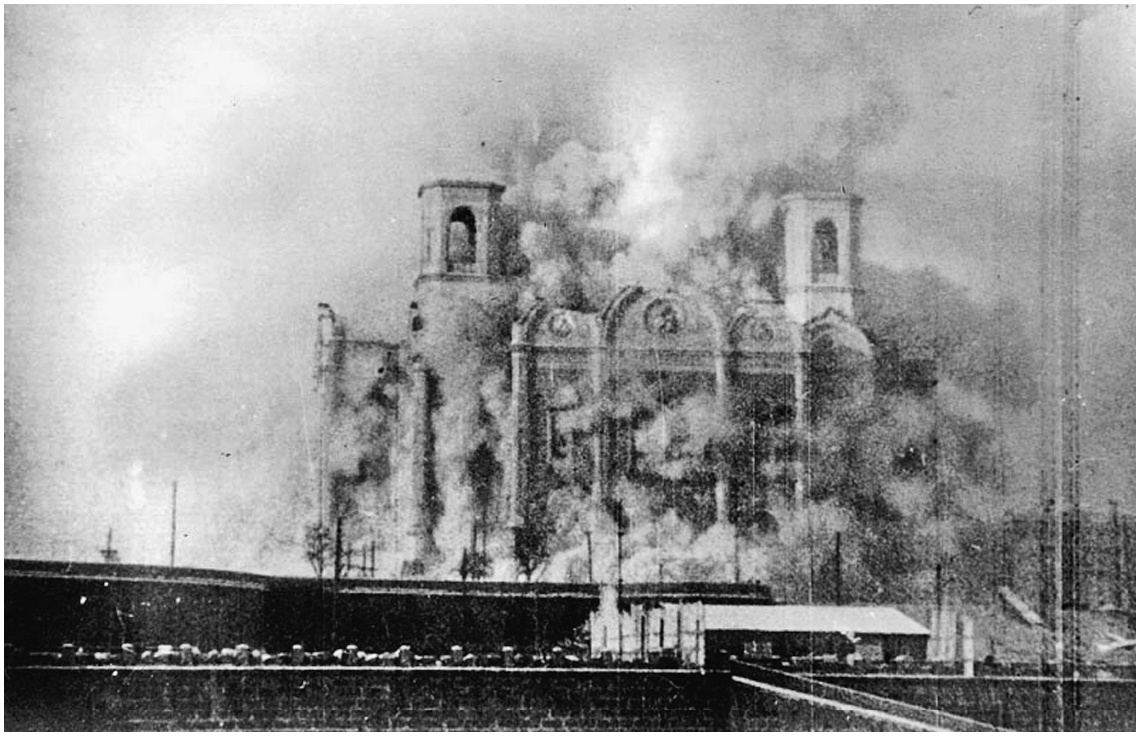


（資料：Myachin, I., Chernov, V., *Moscow, Guide-book for Tourists*, 1970）

	帝政時代（19世紀）	ソ連時代（20世紀）	現　　代（21世紀）
1	—	クロポトキンスカヤ駅 （Кропоткинская）	同左
2	救世主ハリストス大聖堂 （Храм Христа Спасителя）	水泳プール「モスクワ」 （Бассейн для плавания “Москва”）	救世主ハリストス大聖堂 （Храм Христа Спасителя）
3	—	プーシキン記念美術館 （Гос. Музей Изобразительных Искусств им. А. С. Пушкина）	プーシキン記念美術館・欧米芸術ギャラリー（Галерея Искусств а Стран Европы и Америки19-20 вв. Гос. Музея Изобразительных Искусств им. А. С. Пушкина）
4	—	マルクス・エンゲルス博物館 （Музей К. Маркса и Ф. Энгельса）	プーシキン美術館 （Гос. Музей Изобразительных Искусств им. А. С. Пушкина）
5	—	ソヴィエト平和委員会 （Советский Комитет Защиты Мира）	ロシア平和基金 （Россиский Фонд Мира）
6	—	プーシキン博物館 （Гос. Музей А. С. Пушкина）	同左
7	—	科学者クラブ （Центральный дом ученых）	同左

8	—	トルストイ博物館 （Литературный Музей Л. Н. Толстого）	同左
9	—	ソ連邦美術アカデミー （Советская Академия Хдожеств）	ロシア美術アカデミー （Российская Академия Хдожеств）
広場・通りの名称	ヴォルホンカ通り （Улица Волхонка）	ヴォルホンカ通り （Улица Волхонка）	同左 （Улица Волхонка）
	プレチースチェンカ通り （Улица Пречисченка）	クロポトキン通り （Улица Кропоткинская）	プレチースチェンカ通り （Улица Пречисченка）
	ゴーゴリ並木道 （Гоголевский бульвар）	ゴーゴリ並木道 （Гоголевский бульвар）	同左 （Гоголевский бульвар）
	マーリイ・ズナメンスキー横町 （Малый Знаменский переулок）	マルクス・エンゲルス通り （Переурок Маркса и Енгельса）	マーリイ・ズナメンスキー横町 （Малый Знаменский переулок）
	フセヴォロシュツキー横町 （Всеволожский переулок）	地下鉄建設横町（メトロ・ストロイェフスキー） （Метростроевский переулок）	フセヴォロシュツキー横町 （Всеволожский переулок）

往時の救世主ハリストス大聖堂
（Wikipedia「救世主ハリストス大聖堂（2017）」）



大聖堂の爆破（1931年12月）（Wikipedia「救世主ハリストス大聖堂」，2017）

モスクワ川にかかる総主教大橋（патриарший мост）から見た現・救世主ハリストス大聖堂

大聖堂の敷地内バラ園とアレクサンドル２世像

宮殿建設は永久に中止となった。その建築基礎の上に造られたのが屋外市営プール「モスクワ」であった。こちらは1958年の建設開始後，わずか２年で完成した。

状況が変わったのは，ゴルバチョフ（Михаил С. Горбачёв, 1931～）政権下の「ペレストロイカ（перестройка）＝体制再構築」であった。ロシア正教に対する姿勢は緩やかなものになり，ロシア正教千年祭の開催も許可，大聖堂再建の要請も受理した。

ソ連崩壊後の1992年，時の大統領エリツィン（Борис Н. Ельцин, 1931～2007）は「モスクワ再創造基金」（Фонда возрождения столицы）設立法に署名，その基金による建造物の一番に挙げられていたのがこの大聖堂であった。かくして1994年，温水プール「モスクワ」は解体され，翌95年に礎石が置かれる。工事は地下の部分部分の完成を経て，97年のモスクワ建都850年祭での枢要な役割を果たし，外壁の彫刻や内部のフレスコ画作成を経て，ついに2000年，最終的な完成を見る。わずか５年間の工期であった。時代背景が違うとはいえ，先代の大聖堂が44年の歳月を要したのと比べ，何という違いであろうか。もとの大聖堂が，19世紀当時の最新建築技術を駆使して巨大な内部空間を確保し，そこに壁画や彫刻を配したうえ，ロシア最高峰の芸術家――スリコフ（Василий И. Суриков, 1848～1916），クラムスコイ（Иван Н. Крамской, 1837～1887），ヴェレシシャーギン（Василий В. Верещагин, 1842～1904）らを擁し，ことにフレスコ画には完成までに12年を費やして，それぞれ内装を行わせたことなどが大きいのだろう。

かくして救世主ハリストフ大聖堂は，今やモスクワで最も目立つランドマークの一つとなった。

それにしてもプールの敷地はよほど広かったのであろう，１万人を収容する大聖堂を建ててもな

新しく建てられたアレクサンドル２世像

お余裕ある広さである。周りはバラを植えた美しい庭園になっている。その一部にアレクサンドル２世（Александр Н. Романов, 1818～1881）の像が新たに建てられた。帝政時代の皇帝の像が新設されるのは稀なことだ。ソ連時代の像を撤去したり壊したりすることはあっても，また帝政時代からのものをそのまま保存することはあっても，帝政時代の皇帝像を新設するのは，よほどの考えがあってのことと思われる。

像の碑銘にはこう書かれてある。

「皇帝アレクサンドル２世は／1861年にロシアの農奴制を廃止し，何世紀にも亘る搾取から何百万という農民を解放した／軍事上・裁判制度上の改革を実現し／地方自治，市議会や地方参事会（управа）のシステムを導入した／何年も続いたコーカサス戦争（Кавказская война）を終結させ／オスマンの圧政からスラブ人民を解放した／（そして）1881年３月１日，テロリストの行為によって非業の死を遂げた（погиб）」

大変な啓蒙君主に見える。国民を思い，愛国の勇気と軍事的才に恵まれた皇帝のように書かれている。

父親のニコライ１世がクリミヤ戦争に敗れたため，ロシアの近代化が急務と考え，上からの改革を図ったのは確かに事実だ。列強に後れを取らぬよう，殖産興業の目的で農奴解放令を発布し，露土戦争によってオスマントルコに勝利したのも事実だ。しかしバルカン半島から地中海への進出は，ベルリン会議におけるビスマルクの巧妙な外交駆引きによって実現しなかったし，財政難からアラスカをアメリカに売却したのも彼であった。つまりその専制政治は近代化の波にうまく乗れたとは言い難かった。結果，国民感情は離反し「人民の中へ（в народв）」を標榜するナロードニキ（народники）の女性テロリストによって暗殺されることになる。

もちろん世紀末の複雑な政治情勢や列強の動きは無視できない。現在の感覚から過去の歴史上の人物を単に批判することは避けなければならない。とはいえ，その業績について歴史的文脈を軽視し，いい結果だけを抜き出して讃歌するのはどうだろうか。帝政時代の亡霊が，社会主義否定の反動から，突如名誉回復して英雄視されることには違和感を覚えた。愛国と戦勝の部分ばかりがこの国では称賛の基準のようにも思われた。

Ⅵ．モスクワっ子に欠かせない公衆浴場：サンドゥノフ浴場（Сандуновские Бани）

ギリャロフスキーは世紀末から20世紀にかけての様々な風俗を，実によく観察して描写している。中でも公衆浴場（баня）については，当時の愛読者からまだ触れられていないと指摘されたこともあってか，従来以上に熱を込め，思い入れたっぷ

サンドゥノフスキー横町の表示

ロビー入口

個室浴場・共同浴場の看板

浴室は２Ｆ

りに語っている。

ロシアでいう「バーニャ（баня）」は，一種のサウナ風呂なのだが，北欧型ともまた違って特有の施設としくみ，作法がある。しばらく彼の意見を聞いてみよう。

「いかなるモスクワっ子といえども，これなしでは済まされないという場所が一つある――それが風呂屋だ」で始まる。（「風呂屋〔Бани〕」）

1880年代にはすでに「サンドゥノフ浴場（Сандуновские Бани）」ができていて，当時の総督が馬車で乗り付け，家族風呂に入って銀の洗面器と手桶を使ったとか，当時としては珍しい大理石の浴槽があったとかいう話が紹介されている。しかし普通のモスクワっ子は「そもそも蒸し風呂に入って，小枝を束ねた葉バタキ（веничек）で

脱衣室

入浴用フェルト帽（髪を熱から守る）

男湯　玄関前
入口は男女別，一等，特等と分かれている。

体を叩いたり，脱衣場でひと休みして，仲間と“ダベッたり”する」（同章）のが伝統的に好きだった，と書いている。庶民にとっては銭湯が一種の社交場であるのは万国共通のようだ。両者のちがいは施設の調度だけで「水と熱と蒸気は一緒」，とはいえ，時代が変わってしまった。建物は一緒でも，客層が変わり，語る相手がいない以上浴場の記憶も消え失せてしまうだろうと，嘆いている。

だが心配無用，モスクワっ子に欠かせぬバーニャは健在で，あちこちに残っている。ここサンドゥノフ浴場も1800年の創業以来，立派に営業中である。このバーニャは市心にあって，その名のついているサンドゥノフスキー横町（Сандуновский переулок）にある。市心といってもやや下町っぽく，細い路地が入り組んでいて見つけにくい。何人かに聞いて何とか見つけた。看板がかかっている。個室も共同浴場もあるようだ。男女別，一等，特等と入口も分かれている。湯上りの男がタバコを吸いに戸口まで出てきた。腰にタオルを巻きつけているだけで，上半身裸だ。火照る体を冷やす意味もあるのだろう。扉を押してロビーに入ると，前世紀さながらのブルーを基調としたまばゆいばかりの装飾である。今回は入浴の時間がないので，内部やその様子はギリャロフスキーに譲ろう。

「サンドゥノフ浴場は，その横町と同じように，

十九世紀初め，有名な女優で歌手のサンドゥノワ（Сандунова）に因んでつけられた名称である，その名前は今なおプーシキン時代と変わっていない。（中略）脱衣室の鏡のホール，柔らかいソファーには清潔なシーツ，洗練された召使，熟練した三助と風呂番女。脱衣ホールはクラブとなり，実に様々な人々がそこで出会った」「浴場は脱衣室，洗い場，蒸し風呂の３室に分かれていた。（中略）蒸し風呂室は〈炉石〉（каменка）が焚かれ，脱衣室にはオランダ暖炉（голландка）で温められていたが，浴場の花形は何といっても真っ赤な炉石であった。浴場によっては蒸し風呂室だけではなく，これで洗い場も温めているところがあった」（同章）

こうした浴場は社交の場であるだけではなく，散髪，ヒゲ剃り，マメ削り，吸い玉治療，蛭による吸血・放血，さらには抜歯までが，衛生設備もないまま医者の代わりに行われていた。女湯では怪しげな美白療法が行われていた。ある種の草を煮たり，アーモンドの粉を振るったもので洗顔したりしていた。でも浴場の魅力はまだまだ大きい。

「私は相変わらず温かい湯船に浸かっていた。まわりでは洗い場の常として，濡れた裸をぱんぱんと叩く音，蛇口から手桶に注がれる水の音，人々の水をかぶる音，シャワーを浴びる雨のような音が充満して，人の話し声が聞こえないほど。／いつもの通り脱衣室ではみんながおしゃべりをし，流し場では黙りこくり，蒸し風呂では大きなうめき声（гогот）がしている。蒸し風呂のドアが開くと，そのうなり声が流し場まで聞こえてくる。」（同章）

うめき声は三助に葉ハタキでぴしゃぴしゃ叩かれたり，揉まれたりして発する声である。

ロシア近代文学の嚆矢たる詩人プーシキン（Александр С. Пушкин, 1799～1837）やモスクワの詩人シュマーヘル（Пётр В. Шумахер, 1817～1891）もこうしたバーニャの魅力に取りつかれ，

体を叩く白樺や樫の葉のハタキ（веник）
（資料：http://narod-medicina.ru/veniki-dlya-bani.html）

市心にもある公衆浴場（ストレーシニコフ横町）

レストラン「サンドゥーニ」
（資料：http://www.sanduny.ru/restoran/）

出された「ヴィネグレット・サラダ」

それぞれその詩でバーニャ讃歌を歌い上げている。

時代や政体が如何に代わろうとも，人間の生活の軸や基本，文化の伝統，習俗というものは変わることなく継承され，その国民性や民族性を保持し続けるもののようだ。

サンドゥノフ浴場に入れなかった代わりに，この付属レストラン（Ресторан Сандуны）でビジネス・ランチなるものを食べた。昔ながらのシックなレストランで，建物改修時に出てきた調度を使っている由，ビート（свёкла）たっぷりの赤いサラダ（салат винегрет）も懐かしい豚肉のハンバーグ（котлеты из фарша）もソ連時代とは比べ物にならないほど，洗練された旨いものだった。

Ⅶ．ギリャロフスキーの家：卓布（ストレーシニコフ）横町（Переулок Столешников）界隈

帝政末期のモスクワの諸相を精力的に書き残したギリャロフスキーは，半世紀にわたって市心のアパートに住み込んだ。住まいはストレーシニコフ横丁（Переулок Столешников），ここはトゥヴェルスカヤ広場（Тверская площадь）からペトロフカ通り（Улица Петеровка）を結ぶ小路である。1970年頃までは娘夫婦が，没後は孫娘がこの家を守ってきたが，筆者が訪れた2016年 9 月，ギリャロフスキーの家としての整備が終わり，開設準備がまさに行われようとしていた（写真・ギリャロフスキーの碑参照）。

今ではすっかりこの通りも小ぎれいになり，ファッションタウン，ブティック街として見違える

ギリャロフスキーの家（卓布（ストレーシニコフ）横町）
（「1889年から1935年まで住む」と書かれている）

いまは高級ブランドの並ぶブティック街に

ようになったが，当時はどうであったのだろう。

ストレーシニコフ（Столешников）という地名は，もともとストレーシニク（Столешник：卓布，テーブルクロス）から来ており，テーブルクロス作りの職人たちが住んでいた下町であった。おまけにすぐ近くに警察署と消防署があって，お世辞にも閑静な住宅街とは言えなかった。再びギリャロフスキーにあたってみよう。

「モスクワ市会議（Моссовет）の正面の窓の真向かい，つまり広場の奥の，現在辻公園のある界隈に，かつてトヴェリ区警察署と消防署があり，火の見櫓がそびえていた。ここは落ち着くことのない場所だった。一日中，早朝から石の舗道がやかましい。……この広場は卓布（ストレーシニク）横町を介して，市の２つの地区を結ぶ最もにぎやかな場所である。……騒音は昼も夜も絶えることがなかった。……臭いの点でも，いつもいい具合というわけではなかった。……暗闇の中を夜の香水車が，つまり毛の抜けた痩せ馬２頭に繋がれた15台ほど肥桶馬車が長い列をなしてゆくのである」（「火の見櫓の下〔Под каланчой〕」）

革命後，モスクワ市会議，現・モスクワ市庁舎（Моссовет）となっているこの建物は18世紀末に建てられ，当時から19世紀まで歴代のモスクワ提督が住んでいた。よく舞踏会などが開かれたようだが，これでは大変であったろう。火事になれば警鐘が鳴らされ，馬車の消防隊が出動する。警察署も一緒であったから政治犯が中庭から秘密の独房へよく運び込まれた。「南京虫部屋（клоповник）」と呼ばれ，提督の部屋からよく見えたという。中庭にはその他に乱暴者や酔っ払いを放り込むいわゆる「トラ箱（пьяная камера）」もあり，「小礼拝堂（часовня）」と呼ばれる死体安置所（морг）もあった。

提督も大変なところに住んでいたものだ。

「革命はその牢獄も守衛本部も死体安置所，区警察署も一掃した。トヴェリ消防隊は1923年，その火の見櫓の下で創設百周年を祝ったあと，別の場所に移転した。」（同章）

ギリャロフスキーの住んでいたこの界隈で，当時を偲ぶものがまだいくつか残っている。その一つがこの卓布（ストレーシニク）横町から少し北に離れた横町，ペトローフカ通り（улица Петровка）と大ドミトロフカ通り（улица Большая Дмитровка）に挟まれたペテロフスキー横町（Петровский переулок）にある国民（ナーツィア）劇場（Театр Наций）である。この劇場ができた19世紀末にはコルシ劇場（Театр Корша）と呼ばれ，通り名も神学者（ボゴスローフスキ）横町（Богословский переулок）といった。名称こそ変わったものの建物の佇まいは当時のままで，ペトロフカ通りの修道院（Высоко-Петровский Монастырь）を遠望しつつこの界隈を眺めると，19世紀に戻ったような気がする。

当時の様子を，ギリャロフスキーに聞いてみよう。

劇場が跳ねる夜９時頃になると，いわば１等２等３等と客筋に合わせた辻馬車が集まりだし，客待ちの態勢に入る。やがて劇場から観客がどっと出てくると，すさまじい客の奪い合いが始まる。

一方，劇場のはす向かい，大ドミトロフカ通り

ペテロフスキイー横町からヴィソコ・ペトロフスキー修道院を望む

現・モスクワ芸術座分館「国民劇場（旧・コルシ劇場）」

とコズィツキイ横町（Козицкий переулок）の角に，広大な商人クラブ（Купеческий клуб）の建物があった。その中庭では同じ頃，有名な香水会社「ブロカル」にちなんだ綽名「夜のブロカル（ночиные брокары）」と呼ばれる汲み取り馬車が作業をしていた。時間帯が重なると双方がよく鉢合わせをして，大騒ぎになることがあったという。この商人クラブは現在，オペラやバレーを上演する「スタニスラフスキー＆ネミローヴィッチ・ダンチェンコ記念音楽劇場（Музыкальный Театр им. К. С. Станиславского и Вл. И. Немировича-Данченко）」となっている。当時の様子をギリャロフスキーはこう書いている。

「この館は当時モスクワきっての大きく華麗な建物であった。正面（ファサード）はトヴェルスカヤ通りに面し，破風（フロントン）に紋章を掲げ，趣のあるバルコニーを二つ持つ古典様式で建てられていた」（「二つの豪邸物語（История Двух Домов）」）

当時この大ドミトロフカ通りには3つのクラブがあり，「クラブ通り（Клубная улица）」と呼ばれていた。イギリス・クラブ（Английский клуб）に貴族クラブ（Дворянский клуб），それにこの商人クラブである。貴族クラブはのちに貴族会館（Дом благородного собрания）に移るが，それは今の白緑色の美しい多目的ホール旧・労働組合会館（Дом Союзов）である。これらのクラブの移り変わりや料理にも時代の変化が反映される。当初隆盛を極めた貴族が没落すると洗練されたフランス料理は廃れ，商人階級の台頭に伴って昔ながらのロシア料理が取って代わった。ギリャロフスキーはそのメニューを詳しく紹介している。

「小蝶鮫のスープ（стерляжья уха），2アルシン（約1.5m）もある蝶鮫（アセトリーナ）（двухаршинные осетры），大蝶鮫（ベルーガ）の塩漬け（белуга в рассоле），宴会用極上子牛（банкетная телятина），胡桃で育てたクリームのように白い七面鳥（индюшка），小蝶鮫と川明太（かわめんたい）（訳注：魚の名）の肝（налимая печёнка）半々で作った「オープン・ラスチェガイ」（пополамные расстегаи，訳注：上皮のないピロシキ），ワサビ付き子豚（поросёнок с хреном），粥付

きの子豚（поросёнок с кашей）」（「大邸宅と商人とリャーピン寮生〔Дворцы, Купцы и Ляпинцы〕」）

確かにフランス料理のようには洗練はされていないかもしれないが，現代も続く蝶鮫料理やピロシキ（ピローグ），お粥料理といった典型的なロシア料理が並んでいる。

Ⅷ．老舗の食料品店（デリカテッセン）「エリセーエフ（Елисеевский Магазин）」：トヴェルスカヤ通り界隈

もうひとつ，食べ物に関するこの界隈での店舗で欠かせないのが，トゥヴェルスカヤ通り14番地に今なお残る老舗の食料品店（デリカテッセン）「エリセーエフ（Елисеевский Магазин）」である。

現在もその華麗なる内装と豊かで高級な品揃えが健在だが，ソ連時代はなんとも味気なく「第一食料品店（Гастроном No. 1）」という名称であった。しかし人々は昔ながらに「エリセーエフの店」と呼んでいたという。

この建物はペテルブルグの大金持ち・グリゴーリ・エリセーエフ（Григорий Г. Елисеев, 1864～1949）が買い取り，1901年に開設した豪華食料品「バッカスの神殿（Храм Бахуса）」であった。これはもちろん通称であり，公式には「エリセーエフ商店ならびに国産・舶来の酒蔵（Магазин Елисеева и погреба русских и иностранных вин）」と命名されていた。農奴であったともいわれる創業者のピョートルが1813年に小さな店を開いてから３代目となるグリゴーリーが，それまで築き上げた財を惜しみなく投じたもので，この２年後にはペテルブルグ最大の繁華街ネフスキー通りに，同様の豪

「エリセーエフ」（卓布（ストレーシニコフ）横町より見る）

売り場内部

酒売り場への入り口

華絢爛たる店舗を開設した。

モスクワの店舗の開店には2年間を要した。改装中は足場が組まれ，建物全体が木材で覆われたため，まるで巨大な木箱が出来上がったように見えたという。様子がまるで見えないだけに，好奇心の強いモスクワっ子の話題を呼んだ。「インドの仏塔（Индийская пагода）」「回教徒寺院（Мавританский замок）」「バッカスの異国風宮殿（Языческий храм Бахуса）」などと噂されたが，最後の名称が一番近かったようだ。

ついに足場が取り払われ，オープンの日が近づいた。

「巨大な厚板ガラスの窓越しに無数の明かりが輝いていた。／バッカスの神殿であった。」（「ふたつの邸の物語〔История двух домов〕）

舗道は早朝から見物人であふれ，大ガラスの窓越しにのぞき込む群衆でいっぱいだったという。

開店にあたってはお祓いの儀式（освящение с молебствием）が行われ，店は招待客で溢れかえった。ある未発表の詩・「モスクワ叙事詩（ポエマ）」にはこう謳われていた。

「トゥヴェルスカヤ通りの豪華な宮殿
エリセーエフ，よくぞ集めたり数知れぬ人の群れ
目を引くのはソーセージ，クッキー，甘い菓子
燻製・ボイルの腿の肉，
七面鳥また詰め物入りのガチョウ
ニンニク，ピスタチオ，胡椒入りのソーセージ，
チーズはあれこれ取りそろえ
チェスター，スイス，ブリ，パルメザン
番頭のアレクセイ・イリイーチは大奮闘
みごとに積まれた果実の香りの横で，
リボンで飾られたきれいなバスケットのそばで
ここには何でもある――
フランス産のカリビーリ林檎は紋章付きで，
パイナップルも日本産のサクランボも」（同章）

もちろん客は貴族や富裕な商人，選りすぐりの店員は如才なく応対をした。店は大変な盛況であったが，庶民には高根の花であったこと言うまでもない。

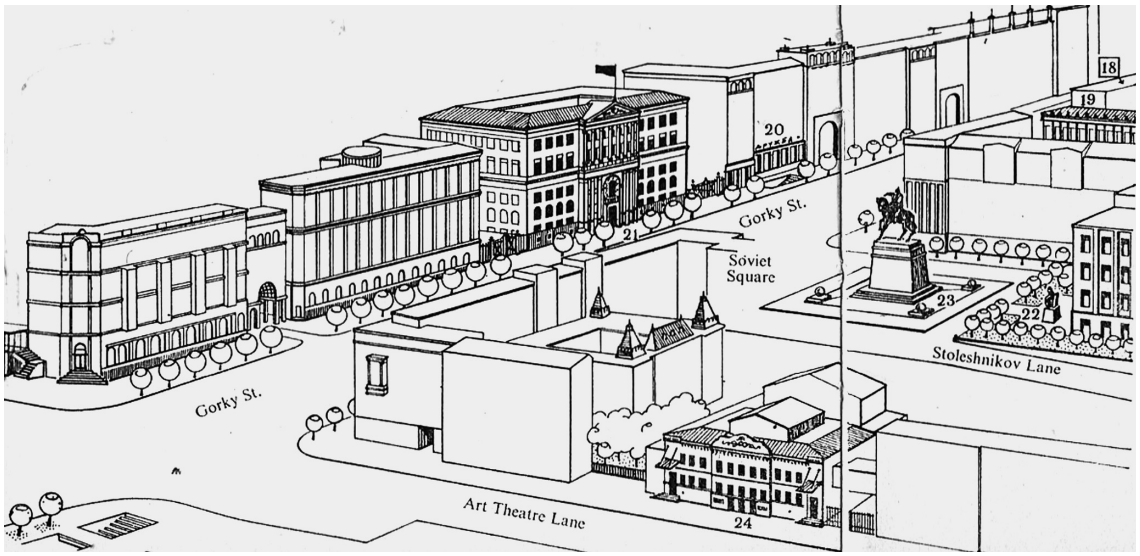
「バッカス神殿」は革命まで存在したが，10月革命後撤収される。グリゴーリ・エリセーエフはパリに亡命し，1949年に彼の地で死去した。

ソ連時代，厳しい食料時代の30年代は唯一パイナップルを売っている店であった。物資不足の時代でも，名前こそ味気ない「食料品店（ガストロノム）NO. 1」であったが，一貫してだれもが「エリセーエフ」と呼び，この店は貴重な珍品を商う店として有名であった。

ソ連崩壊後，2010年に新装開店したが，内装は当時そのままで，豪華絢爛のインテリアは往時を偲ばせるに十分であった。

ちなみに日本学者・東洋学者で東京大学に学んだセルゲイ・エリセーエフ（Сергей Г. Елисеев, 1889～1975）はグリゴーリーの息子である。

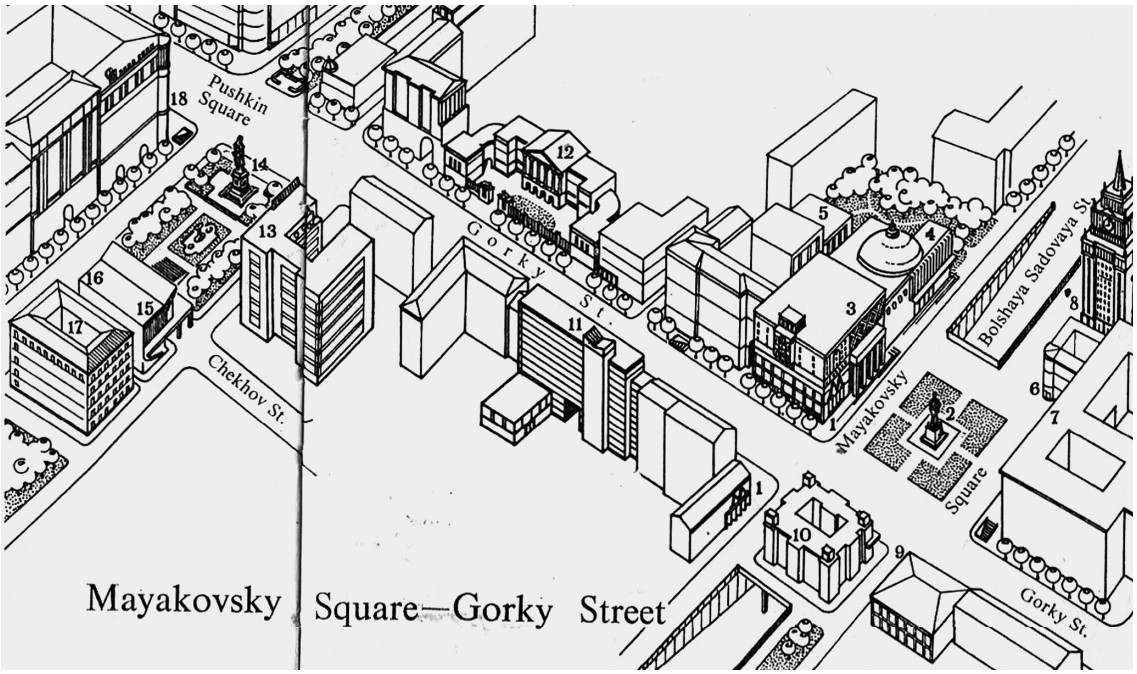
図５　1970年代のトゥヴェルスカヤ大通り（旧・ゴーリキー通り）とその界隈の変遷



（資料：Myachin, I., Chernov, V., *Moscow, Guide-book for Tourists*, 1970）

	帝政時代（19世紀）	ソ連時代（20世紀）	現　　代（21世紀）
18	不詳	中央俳優クラブ・全ロシア劇場協会 （Центральный Дом актёра имени А. А. Яблочкиной）	商店ビル （ЦДА，1991年にアルバート通りに移転）
19	エリセーエフ商会 （Елисеевский Магазин）	食料品店 NO. 1 （Гастромом НО1）	エリセーエフ商会 （Елисеевский Магазин）
20	不詳	書店「友情（ドゥルージバ）」 （Дружба）	両替，ホテル等商店ビル
21	モスクワ総督邸 （Генерал-губернаторский дом）	モスクワ・ソヴィエト市議会 （Моссовет）	モスクワ市庁舎 （Моссовет）
22	―	レーニン記念碑 （Памятник В. И. Ленину）	同左
23	―	ユーリー・ドルゴルーキ像（1954） （Памятник Ю. Долгорукому）	同左
24	芸術劇場（1898） （Московский Художественный Академический Театр）	国立モスクワ芸術アカデミー劇場 （МХАТ）	チェーホフ記念国立モスクワ芸術アカデミー劇場（МХАТ им. А. П. Чехова, 1989）
通り名	トゥヴェルスカヤ通り （Тверская ул.）	ゴーリキー通り （Ул. Горикого）	トゥヴェルスカヤ通り （Тверская ул.）
	カメルゲールスキー横町 （Камергерский переулок）	劇場横町 （Театрльный переулок）	カメルゲールスキー横町 （Камергерский переулок）
	ストレーシニコフ横町 （Переулок Столешников）	同左	同左
広場	トゥヴェルスカヤ広場 （Тверская пл.）	ソヴィエト広場 （Советская пл.）	トゥヴェルスカヤ広場 （Тверская пл.）

図６　トゥヴェルスカヤ通りとプーシキン広場・マヤコフスキー広場界隈



（資料：Myachin, I., Chernov, V., *Moscow, Guide-book for Tourists*, 1970）

	帝政時代（19世紀）	ソ連時代（20世紀）	現　　代（21世紀）
1	—	マヤコフスキー駅 （Маяковская）	同左
2	—	マヤコフスキー像 （Памятник Маяковскому）	同左
3	—	チャイコフスキー記念コンサートホール（1940）（Концертный Зал им. П. И. Чайковского）	同左
4	—	風刺劇場 （Театр Сатиры）	同左
5	—	モスソヴィエト記念劇場 （Театр им. Моссовета）	同左
6	—	「同時代人（ソヴレメンニク）」劇場 （Театр “Современник”）	商業ビル
8	—	ホテル「ペキン」 （Гос. “Пекин”）	同左（３つ星ホテル）
9	—	中央人形劇場（1970年移転） （ТеатрКукол им. С. В. Образцова）	同左（サドーヴァヤ･サモチョーチナヤ通りに移転）
10	—	レストラン「ソフィア」 （ресторан “София”）	商業ビル
11	—	ホテル「ミンスク」 （Гостиница “Минск”）	「インターコンチネンタル･ホテル モスクワ」（５つ星ホテル） （Intercontinental Moscow Tverskaya）

12	イギリス・クラブ （Английский клуб）	革命博物館 （Музей Революции）	現代史博物館 （Музей Современной Истории России）
13	—	「イズベスチャ」編集局 （Газета “Известия”）	同左（ただし民間紙）
14	プーシキン像（大通り反対側公園）（Памятник А. С. Пушкину）	プーシキン像（現在地） （Памятник А. С. Пушкину）	同左
15	—	映画館「ロシア」 （кинотеатр “Россия”）	同左
16	—	雑誌「ノーヴオエ･ブレーミャ」編集局（“Новое Время”）	不詳
17	—	雑誌「ノーヴォスチ」編集局 （“Новости”）	ニュース配信事業･出版社「ノーヴォスチ」（Фк-Новости Информационное Агенство）
通り名	トゥヴェルスカヤ通り （Тверская ул.）	ゴーリキー通り（1935年から道幅倍増）（Ул. Горикого）	トゥヴェルスカヤ通り （Тверская ул.）
	小ドミトロフカ通り （Ул. Малая Дмитровка）	チェーホフ通り （Ул. Чехова）	小ドミトロフカ通り （Ул. Малая Дмитровка）
	大庭園環状道路（ボリシャヤ･サドーヴァヤ通り） （Большая Садовая ул.）	同左	同左
広場名	主受難（ストラスナヤ）広場 （Страстная пл.）	プーシキン広場 （Пушкинская пл.）	同左
	凱旋広場 （Триумфальная пл.）	マヤコフスキー広場 （пл. Маяковского）	凱旋広場 （Триумфальная пл.）

Ⅸ．まとめ

以上，現代に続くモスクワッ子の生活ぶりを含めて直近の３世紀にわたり，モスクワの諸施設や建物の推移，駅名や通り・広場の名称の変遷を見てきた。

冒頭にふれたとおり，多くの名称変更は社会主義時代のほぼ１世紀を消し去り，かつての帝政時代を懐かしむかのような回顧・回帰型の変更が多かった。建物・施設の使用にしても社会主義時代を排斥し，帝政時代を再評価するものに変更したり，その威容を再現したりするものもあった。多くの博物館がそうであったし，町中のいたるところでは教会や聖堂が修理を施され，活発な宗教活動が行われていた。

ギリャロフスキーは，残念ながら宗教に関する言及をほとんどしていない。したがって，帝政時代の状況は窺い知る由がない。社会主義政権への遠慮・配慮もあっただろうが，彼自身の現実的な気質も大きかったのだろう。晩年キリスト教徒の本義・原理に回帰したトルストイ（Лев Н. Толстой, 1828～1910）よりも医者でリアリストのチェホフ（Антон П. Чехов, 1860～1904）と気性があったというエピソードもある。

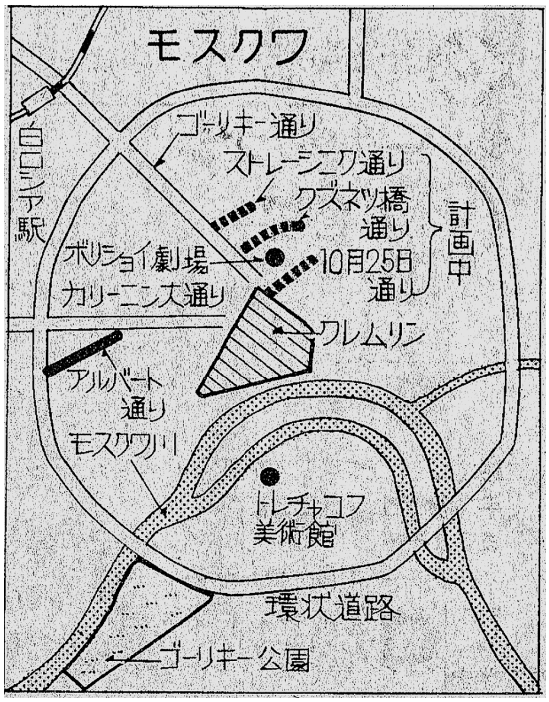
それにしても70年という空白の歳月と絶えざる弾圧に耐え，ようやく今日，市内各所の教会や聖堂の修復へと結び付け，ついにかの救世主ハリストス大聖堂を再建させるに至った信仰の力は―精神的にも経済的にも―大変なものだ。

ただ，こうして様々な分野にわたってモスクワ

の歩んできた道を振り返ると，社会主義の招来は，帝政時代のあまりにも悲惨な貧困や混沌からの思い切った脱出という，歴史の必然・大転換という要素もあったに違いない。貧民街ヒトロフカの惨状，貴族・大商人と底辺の人々との大きすぎる格差，こうしたものを考え併せると，集合住宅の確保，地下鉄をはじめとする社会的インフラの整備，教育の機会均等等，社会主義政権の果たしてきた役割は決して小さくない。

ここに古い日本の新聞がある。1985年11月15日の朝日新聞の記事である。「海外・喜怒哀楽」という欄で，当時のモスクワ特派員・島田博記者が書いたものである。

その見出しは「歴史のかおり漂う遊歩道―モスクワに初めて誕生」というもので，「トルストイ・プーシキン…ゆかりの通りを改造」と続く。内容はこの見出し通りで，市内中心部のアルバート通り（注：現在も同名）に初めて遊歩道が誕生



1985年11月15日の朝日新聞より

したことを報じている。続きを抜粋して見よう。

「自動車を締め出しただけでない。商業センターとして栄え，文化人が多数住んだ十九世紀の景観を復活しながら，快適さと消費サービスを満足させようという古くて新しい町づくりだ。社会主義・ソ連も今月7日で六十八歳を迎え，ようやくたどりついたゆとりの表れでもある」（1985年11月15日・朝日新聞）

「ようやくたどりついたゆとり」――この景観は確かにそう見える。ベンチに腰かけ，通りをそぞろ歩きする写真を見るとその通りだ。だがペレストロイカが始まったこの年，この記事のかかれたわずか6年後にまさかソ連が解体するとは，この記者を含め誰一人想定はしていなかった。

「アルバート通りをつくり替える計画は，歴史記念物保護法の法律が一九七六年に制定されたのがきっかけだった。モスクワ市がモデルケースとしてこの通りを取り上げた。環状道路とカリーニン大通り（注：現・新アルバート通り）に隣接していて，自動車を締め出しても支障がない，商業街としての伝統を持つとともに文化人がかつて多く住み，歴史保存にふさわしい，という理由からだった。」

記事はモスクワ都市建設展示館の主任(52)の言葉としてこんなことを紹介している。

「私が小学校のとき住んでいたアパートは，十三家族，五十四人が一つの台所，トイレ，ふろを一緒に使い，それぞれの家族の部屋は一つか二つだった。それが，三十一歳になる長男の場合，三十五人の同級生のうち三十人が，それぞれに台所とトイレのあるアパートに住んでいた。そして十八歳の次男には，個室まで持つ同級生がいる」

経済は体制のいかんを問わず地球規模で発展し，豊かさへの願望を膨らませ，人の生き方を考え直させる。もはや計画経済や一国の内輪の理論では国民を納得・説得させることはできない状況にな

っていた。

モスクワ総合都市計画研究所の都市建設研究部長(48)は，歩行者天国の目的をこう言う。

「人間のための道を造ることだ。都市や国民の歴史を歩行者に語りかける通り，人々に安らぎと休息を提供する道路の建設だ。（中略）この通りは文化とサービスの質の向上のための実験」

社会主義国家も68年にしてこのゆとりと人間重視の視点を持ち始めた。強靭な国家の建設，公共のための尽力という大義は薄らぎ，歴史と文化を振り返り，個を大切にする価値観が経済の力を背景に，ここまでたどり着いた。それはの資本主義先進国の価値観とほぼ変わらない。

こうした動きはゴルバチョフの「ペレストロイカ」という緩和改革政策を招来させたが，地球規模で流動する経済と情報の奔流はこうした漸進主義を呑み込んでいった。

かくして，社会主義国家ソ連は，果実が熟れてついに落ちるがごとく1991年一挙に崩壊した。

さて，資本主義社会に仲間入りしたロシア，すでに四半世紀を閲して，国際社会でどういう立ち位置に立とうとしているのか。その歴史観はどう変わったのか。そろそろ本稿のテーマである地名・駅名・通りの名称，あるいは銅像の撤去・保存等からみて，モスクワの不易流行と，今後には何がふさわしいと考えているのか，まとめてみたい。

これまでの検討を振り返ってみると

1．基本的にソ連時代の名称は排したい。

2．社会主義の「暗部」や「圧政」を想起せしめる像，とりわけ政治家のものはつとめて廃したい。

3．生活の基本的な伝統――食生活や宗教・風俗等帝政時代から慣れ親しんできたものは復活も含めそのまま保持したい。

4．とりわけ，文化・芸術に関する国民的な偉人は時代・体制を問わず残す。

5．一方，帝政時代の皇帝や英雄でも，ロシアの近代化に寄与したり，他国との戦争を勝利に導いたりした功績が認められるものは，これまでの社会主義的歴史観を離れて，正当に評価し，像の建立も考えたい。

6．帝政，社会主義政権を問わず，歴史上，外国との戦争を勝利に導いたり，祖国戦争（ナポレオン戦争）・大祖国戦争（第２次世界戦争でのナチとの闘い）を戦った英雄は顕彰したい。

こうした視点から直近の諸物の名称変更が行われたと思われる。

確認のため例を挙げるなら，

1，2，3は，

①広場：ジェルジンスキー→ルビャンカ，十月（オクチャブリ）→マネージ，スヴェルドフ→劇場（チアトル）等

②大通り：カリーニン→新アルバート，ゴーリキー→トゥヴェルスカヤ，カール・マルクス→旧バスマンナヤ，キーロフ→ミャスニツカヤ，クイブィシェフ→イリインカ，クロポトキン→プレスチェンカ等

③地下鉄駅：ジェルジンスキー→ルビャンカ，コルホーズ→スハレフ，スヴェルドルフ→劇場（チアトル），マルクス大通り→獲物街（オホットヌイ・リャド）等

④像・彫刻：ルビャンカのジェルジンスキー像，クレムリン内のレーニン像等の撤去

4は，文豪（M.ゴーリキーを除く），詩人，文化人（イワン・フョードロフ他）等

5，6は，アレクサンドルフスキー庭園のアレクサンドル１世像，温水プール跡地・庭園内のアレクサンドル２世の像等

であろう。

とはいえ，これらの基準は絶対的なものではなく，相互に矛盾するものもある。

例えばマスクス。その名も残る革命広場にマルクス像は残り，「万国の労働者よ，団結せよ」とロシア語で呼びかけている。レーニンも徹底していない。人気のあるレーニン廟は残し，図書館にもレーニン記念の名は残る。しかしクレムリン内の像は撤去され，モスクワ大学のある「レーニンが丘」は「雀が丘」という帝政時代の呼称に戻った。しかしプーシキン像の背後のレーニン像は残されている。

こうしてみると，１～５の理由は大枠としての基準，原則に過ぎず，ケースバイケースである。ソ連時代の政治家でも，立像はともかくとして，建物の壁面に付けられた顕彰の浮彫（レリーフ）はほとんどがそのまま残されている。

結局，残る６の要素が一番大きく，かつしっかり徹底しているように思われる。

これは近現代に限らない。例えば，赤の広場，ポクロフスキー聖堂（ワシーリー・ブラジェンヌイ寺院）（Собор Покрова что на Рву, Собор Василия Блаженного）の前に建つニージニ・ノヴゴロドの商人ミーニン（Кузьма Минин，16世紀末～1616）とスーズダリ大公・ポジャルスキー（Князь Дмитрий М. Пожарский, 1578～1642）の像がある。長引くロシア・ポーランド戦争の時代，ロシアは追いつめられ，内部対立に至るまでに激化していたが，この２人が1612年，国民に決起を呼びかけ，１万人を超える義勇軍が結成され，ようやくモスクワがポーランド軍から解放されたのである。そして翌1613年にはミハイル・ロマノフがツァーリに選出され，ロマノフ朝が始まることになる。像の作られたのが1812年であるから，政体の変化にかかわらず，ここに200年余立ち続けていることになる。一方，新しいものとしてはマネージ広場のゲオルギー・ジューコフ元帥（Георгий К. Жуков, 1896～1974）の騎馬像（戦勝50周年の1995年に建立）があろう。ジューコフはスターリンとの確執もうわさされる人物だが，大祖国戦争でナチを打ち破って元帥にまで上り詰め，スターリンに代わって赤の広場で馬上から戦勝閲兵式を行った英雄である。同じ理由からモスクワ北方の

ミーニンとポジャルスキー
（資料：.expedia.co.jp/Minin-And-Pozharsky-Monument）

ジューコフ元帥
（資料：http://kou-arium.blog.so-net.ne.jp）

レニングラード街道（Ленинградское Шоссе）も，ナチ侵攻・撤退の形見としてその戦勝記念碑とともに名称を残している。さらにクトゥーゾフ大通り（Кутузовский проспект）も健在だが，彼（М. И. Голенищев-Кутузов, 1745～1813）もナポレオンとの祖国戦争（1882年）を勝利に導いた英雄だ。いずれの戦いも敵軍以上の死者・犠牲者を出しての辛勝である。

こうしてみてくると，この３世紀を貫いてモスクワっ子に，いやロシア人に貫徹しているものは民族の同一性（アイデンティティ）ともいえる衣食住や宗教等生活上の「不易」と併せ，政治体制の如何に関わらぬ愛国心，国防の心であることが見えてくる。大統領プーチンの絶対的な人気の秘密も，彼の肉体的・精神的「強靭さ」のイメージ浸透と国益に対する執着・こだわりの徹底にあると思われる。ウクライナ問題も北方領土問題も，ロシア人にとっては一歩も譲れない「国益」なのである。

モスクワは今マネジ広場に2018年のFIFA（サッカー）ワールドカップ開催に向けた飾りつけやカウントダウンの広告塔が設置されている。しかし，筆者の訪れた2016年９月には，モスクワ建市の周年行事の準備（＃МОСКОВСКИЕСЕЗОНЫ）のほうが華やかに見えた。３年前には300万人を超える市民が参加したというから，今回869回の祝典はどうだったのだろう。国を挙げての国威発揚はロシアに限ったことではない。だが幾度とない防衛戦の体験と歴史的な南下政策，北の不凍港確保への執念は一貫した歴史教育と相まって，国民にしっかりと根付いている。今回の論考の結論は，こうした文脈で見るならば，帝政・社会主義体制という政体の違いに基づく名称の変更ではなく，変わることなき愛国の英雄，あるいは文化・芸術の国家的偉人という不易の価値観に根差していることがわかる。

モスクワ市役所前，モスクワ建国の父・ユーリー・ドルゴルーキーは鎧兜の騎馬姿で永遠に右手を掲げ，赤の広場のミーニンとポジャルスキーは祖国を侵攻するものは断固許さじと手を上げ続け，さらにマネージ広場のジューコフ元帥はロシアの兵士を閲兵し続けている。ロシア・モスクワの建国と防衛のシンボルともいえるこの三像は今後もこの３世紀同様，愛国ロシアのゆくべき方向を高々と指し示し続けることであろう。

愛国的英雄の像
ユーリー・ドルゴルーキー
（資料：u.wikipedia.org/wiki/ Юрий_Владимирович Долгорукий）

主要参考文献
・Гиляровский, Владимир Алексеевич, Москва и Москвичи, 1934, Издательство АСТ , 2016
・V.A. ギリャロフスキー『帝政末期のモスクワ』村手義治訳，中公文庫，1990
・V.A. ギリャロフスキー『世紀末のモスクワ―モスクワとモスクワ人』中田甫訳，群像社，1985
・Д.Дягилев, Москва Столица СССР 1962, Московский Рабочий, 1962
・Myachin, I., Chernov, V., Moscow, Guide-book for Tourists, Novosti Press Agency Publishing House, Moscow, 1970
・Эм Двинский, Москва Кпаткий Путеводитель, Московский Рабочий, 1971
・Олег Рассохин, Москва Пешком, Самые интересные прогулки по столице, Эксмо, 2016

・Олег Рассохин, Москва Пешком-2, Новые интересные прогулки по столице, Эксмо, 2016
・Указатель Москвы 1887，Геологический институт АН СССР，（復刻版モスクワ地図1882年，発行年不詳）
・Москва 2016 план города《РУЗ Ко》, 2016
・「Москва　モスクワ市街地図」ロシア旅行社，2010
・『地球の歩き方　ロシア』（株）ダイヤモンド社，2016
・下斗米伸夫・島田博編著『現代ロシアを知るための60章〔第 2 版〕』明石書店，2012
・原卓也監修『読んで旅する世界の歴史と文化　ロシア』新潮社，2007
・沼野充義・沼野恭子『世界の食文化19　ロシア』農山漁村文化協会，2011
・『現代思想―特集ロシア（2014年 7 月号）』，青土社，2014.

（本論文は本学の個人研究費の助成によって執筆されたものである）